

第140回 日文研フォーラム



中国現代建築の成立基盤

—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—

Creating the Foundation of Contemporary Chinese Architecture

—Zhao Dongri, an Architect Trained in Japan, and Diet Hall of P.R. China—



徐 蘇斌

XU Subin

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

中国現代建築の成立基盤

—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—

Creating the Foundation of Contemporary Chinese Architecture

—Zhao Dongri, an Architect Trained in Japan, and Diet Hall of P.R. China—

● 発表者 ●

徐 蘇斌
XU Subin

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies



2001年6月12日 (火)

発表者紹介

徐 蘇斌

XU Subin

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies

学歴

- 1980.9～1984.7 天津大学 建築学専攻卒業 学士号（工学）取得
1984.9～1987.6 天津大学 建築学専攻修士課程修了 修士号（工学）取得
1988.3～1992.3 天津大学 建築学専攻博士課程修了 博士号（工学）取得

研究歴

- 1987.7～1993.3 天津大学 助手・講師
1992.4～1994.3 日本学術振興会（東京） 外国人特別研究員
1992.4～1996.3 東京大学生産技術研究所 外国人博士研究員
1996.3～1998.3 清華大学 ポストドクター・講師
1998.4～1999.3 東京大学生産技術研究所 博士研究員
1999.4～2000.10 東京大学東洋文化研究所 外国人研究員
1999.4～2001.2 東京造形大学 非常勤講師

著書・論文等

『日本对中国城市与建筑的研究』（邦訳：『日本における中国の都市と建築に関する研究』、中国水利水電出版社、1999年2月、北京。国際交流基金、サントリー文化財団出版助成

『风水理论研究』（共著・邦訳：『風水理論研究』、天津大学出版社、1992年8月、天津、pp.107～116）

「从《学艺》看近代留日学生传播信息的媒介作用」（邦訳：『学芸』から見た近代留学生の媒介としての役割』『中国近代建築研究與保護』No2、清華大学出版社、2001年7月、北京、pp.32～49）

「日本における東洋建築史の教育の歴史と現状」（『東京造形大学研究報』、No2、東京造形大学、2001年、東京、pp.5～20）

「清末四川与日本の交往之研究——留日的铁路留学生、雇佣日本技术者与成都“辛亥秋保路死事纪念碑”」（邦訳：「清末四川と日本との交流についての研究——鉄道留学生、雇い日本人技術者と成都「辛亥秋保路死事記念碑」』『建築史論文集』、No13、2000年7月、清華大学出版社、1999年10月、北京、pp.219～236）

「中国建筑教育の原点——清末京師大学堂与明治期の日本 中日文化关系史研究」（邦訳：「中国建筑教育の原点——清末京師大学堂と明治期の日本 中日文化関係史についての研究」『中国近代建築研究與保護』、No1、清華大学出版社、1999年9月、北京、pp.207～220）

はじめに

周知のように、戦後の一時期、中国と日本との関係は冷戦により凍結されていた。しかし、そうした中にあって、趙冬日という、かつて日本に留学した経験をもつ一人の建築家によって、戦前の日本と五〇年代の中国建築とが結びつけられていた。

ここでは、趙冬日の経歴と建築作品を主たる研究対象として、ナシヨナリズムとの関連性を論述することを試みる。すなわち、思想と表現の問題についても足を踏み入れ、社会主義の建築とは何か、また社会主義におけるナシヨナリズムとは何か、建築において如何に表現されたか、日本のナシヨナリズムとの関係を論述する。あわせて、この歴史的事実にスポットをあて、当時の社会的背景を念頭に置きながら、中国現代建築の成立基盤について考察を試みたい。¹

一 一九三〇年代の中国人留学生—中国建築と日本との接点

1 近代日本における建築留学生

実藤恵秀は近代日本における中国人留学生（人文・社会系）を統計的に分析しているが、比較のため、戦前期（一九〇〇—一九四〇）における工学系留学生の割合を算出してみると、多かつたのは、一九〇五年の二七%と二六年の二八%で、平均的には、一〇—二〇%の間にあつたことが知られる。因みに、趙冬日が入学した一九三六年は一〇%であつた。

地域的にみると、東京を中心としていたことが知られ、一九〇〇—一九四五年の間における卒業生数では、東京高等工業学校（東京工業大学）が七八五人と群を抜いており、大阪高等工業学校（大阪工業大学）の一六五人がそれに続いたが、東西の差は歴然としていた。

建築・土木の両科に限定すると、その数は建築科一八五人、土木科一四〇人となり、建築科だけでも留学生の卒業生数は工学系の第三位を占めていた。

趙冬日の母校・早稲田大学では、一八九九年以来、清国留学生を受け入れてきたが、一九〇五年七月には、新たに特設機関として清国留学生部の設立を内外に表明した。これを契機として、一九〇六年には来日する留学生はピークを迎えることになった。清国留学生部以外では、早稲田大学の中国人留学生は、政治経済学部の卒業生が一番多かった。『日本留学中華人名調』（一九三九）によれば、一九〇五年から一九三九年までの政治経済学部の卒業生は一二七人を数え、対して、理工学部の卒業生は二人であった。

早稲田大学の建築学科では、一九一〇年九月に建築学本科第一回生（二二名）の授業が開始された。建築学科の誕生である。早稲田大学建築学科創設の準備段階から実質的な顧問として尽力したのは、日本建築界の元勳として知られた辰野金吾であった。彼は、一八七九年に工部大学校造家学科（現・東京大学建築学科）の第一回卒業生であり、工部大学校・帝国大学工科大学教授、同工科大学長、建築学会会長などを歴任した人物である。彼は大隈重信と同郷（佐賀）でもあったが、大学建設のために力を注いだ。

その後、やはり帝国大学教授であった塚本靖、伊東忠太などの尽力も加わり、新たな高等教育機関の誕生に対する期待を推察することができる。一九〇九年四月には、佐藤功一が建築学科主任教授に就任した。佐

藤は一九〇三年に帝国大学を卒業した俊英で、当時弱冠二十九歳であった。⁴

建築学科における最初の中国人留学生は一九一六年卒業の傅為基であった。⁵その後、一九一九年に須曾蔭、一九二五年には周繼冕が続いた。⁶筆者の統計によれば、一九四九年までの卒業生は一五名を数えた。なお、趙冬日の卒業した一九四一年の留学生については以下のことが判明している(図1)。

王可久(一九一〇)・・・錦州盤山人。一九三八年に官費入学により、早稲田附属高等学院に入学。その後、早稲田大学理工学部に進学し、四一年三月卒業。卒業設計は「市民図書館」、卒業論文は「満州住宅建築に就いて」。⁷

陳鯨(一九一三)・・・広東恩平人。上海医学院を卒業後、一九三九年に第一早稲田高等学院を経て、早稲田大学理工学部に入學、四一年三月に卒業。卒業設計は「中華民国青年会館試案」、卒業論文は「工場断面に於ける自然換気に関する実験的研究」(仲崎正一と合作)。⁸

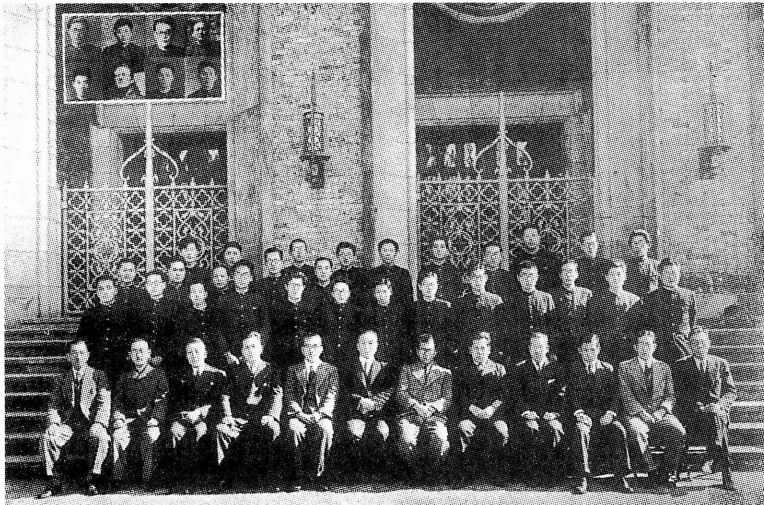


図1 1941年早稲田大学建築学科卒業写真。後列左端が趙冬日、左から6番目は王可久。後から2列目左から2番目は林慶豊、3番目は陳鯨。

林慶豊（一九一三・五・一六—一九九五・一・二六）…台湾台南人。台湾第一中学校を経て、早稲田大学に入学。四一年三月卒業。卒業設計は「山麓に建つサナトリウム」、卒業論文は「書光の実測による採光能率の研究照度と作業能率の関係」（小松謙治、田久保義男と共著）。卒業後、すぐに台湾には戻らず、鹿島建設株式会社社工師となる。戦後、米国第八軍技術本部顧問工師。台湾光復の後、建築師事務所を開設。組建台湾建築技師工会、任理事長（一九六一—一九六五）、台北市政府都市計画委員会委員を歴任。一九六五年には、中国文化学院建築及都市設計学系教授。設計は台泥人楼、台肥大楼、双連大楼、台南神学院颂声堂、省立高雄医院、康寧總医院などがある。

2 趙冬日の建築留学

趙冬日は一九一四年九月、遼寧省彰式県に生まれた。北京（当時は北平）で高校生活を送った後、一九三四年に単身日本へ渡り、後に述懐するように、七年間におよぶ「人生にとつて最も重要な大学における学習段階」¹⁰が開始された。最初の一年間で日本語を学び、翌一九三五年には早稲田高等工学校に入学、三年豫科を終え、さらに一九三八年には早稲田大学理工学部建築科に入学を果たしている。一方、彼が留学した時代は日本のナシヨナリズムが「過熱」¹¹していた時期でもあり、満州事変、二・二六事件、日中戦争、日本の国際社会からの離脱など、一連の出来事は中国人留学生に大きな衝撃を与えた。

さて、趙冬日の留学時代、建築教育においては歴史教育が重視され、「西洋建築史」¹²・「日本建築史」・「東洋建築史」・「芸術史」の四つの科目が設置されていた。¹³そうした傾向は当時の東京帝国大学でも同様であった。特に注意すべきは、歴史教育の中で「東洋建築史」が一つの講義科目として設置されていたことである。

今日、建築学科における歴史教育と言え、日本建築か西洋建築についての講義が半年、あるいは通年で教育されることはあつても、東洋建築史が前者と対等に教育されるのは例外的と言つても過言ではない。

早稲田大学の「東洋建築史」の教育は、一九一〇年に本科・建築科で行われた伊東忠太の講義が最初となる。すでに、東京美術学校（現・東京芸術大学）では、伊東により東洋建築史の講義が開設されていたが、東京帝国大学（一九〇七）に次いで、日本では三番目に数えられる¹⁴。その意味では、早稲田大学における「東洋建築史」の講義は比較的早いものであつた。

伊東が東京美術学校や東京帝国大学で教育に当たつた学生には、中国人留学生がいなかつたため、早稲田大学で初めて中国人留学生を教えたことになる。その他、伊東忠太は一九二九年に東京工業大学の講義を担当し、そこでも中国人留学生に対する教育を行つていた¹⁵。

趙冬日は日中関係については非常に慎重な態度で、留学時代のことはあまり語つていないが、伊東忠太の研究に対しては敬意を表していたという¹⁶。なお、趙の卒業論文のテーマは「中国建築裝飾に就いて」であつたが、実はこのテーマは当時の伊東の研究と密接に係るものであつた。伊東は一九二九年、東方文化学院の研究員として奉職していたが、「支那建築裝飾」をテーマに、精力的に中国調査を展開していた。そして、その成果となる『支那建築裝飾』全三巻を一九四一—四二年にかけて出版したのであつた¹⁷。つまり、趙は一九四一年に卒業したが、論文完成時において、伊東も同じ研究に力を注いでいたことになる。

『早稲田建築学報』¹⁸には「卒業の計画及び論文梗概」がある。そこには、趙冬日の論文につ

いての概要が記されている。

本論文は中国太古から今日に至る迄の中国建築様式を論述したものである。中国黄河流域に開明の光が閃き始めて、其価値に至つては古今東西あらゆる文明の中に最も重要且つ光輝なるもの、一つである。黄河流域に起こりたる文明は即ち漢民族の文明であつて、其淵源を追究せば五千年の昔に溯るのであるが、尤も周時代から既に文化の燦爛たるものがあつたことは古代の文献及び実物等に由つて知ることが出来る。元來建築物などの生活上 必要から起りたるものにして、其国民性の習慣、風俗、嗜好、趣味等に適する如く造られ且つ其の芸術及び表現の上に良く時代を反映し文化程度を具現するのであるから、各時代の文化の特質と其の発達過程を知らんと欲せば、其時代の建築物を研究すれば知らる。依つて本論は二編に分ちて、第一編にて中国建築を論じ、第二編は中国の建築裝飾に就いて述べた。

尚本論の資料にせらるゝ、建築物は著者の足跡の到る所の華北地方に限られてゐることを断り置く。

趙は伊東のフィールドワークの方法で華北地方を調査し、中国建築を学術的に認識するようになった。当時の留学生は日本のナシヨナリズムが「過熱」する環境下にあつたが、むしろ逆に、自国のナシヨナリズム感情が刺激され、素朴な愛国心を抱くようになったと思われる。趙は留学時代の東京について、「解放前の北京とは比較できない」と言い、その愛国者としての一面が窺える。他方、東京工業大学、京都帝国大学の卒業論文の中にも中国建築に関する内容が看取できるが、通底する考えを持つていたかも知れない。

さて、当時の日本にあつて、趙にとつて印象深い建築は国会議事堂であつた。²⁰

この建築の存在を通して、日本の建築思想の一面を垣間見ることが出来る。一八八六年の臨時建築局の設置に始まり、実に五〇年の歳月の後に竣工したもので（一九三六年）、工事自体を見ても、一九一八年に着工して以来、一八年間に及んでいる。議院建築を巡る多くの建築家たちの努力と夢と角逐については、幾つかの興味深いメモワールが記されている。²¹近年では、建築史家・鈴木博之によつて、この建築の政治との関連性が報告されている。²²

完成時は国家的イベントが催され、数多くの見学者たちで賑わいを見せていた。²³見学のための経路図も計画され、それに合わせて商品の販売もされていた。むろん、趙も見学に足を運んでいるが、後に、この巨大な折衷主義建築の存在は、彼を通して、人民大会堂の建設に少なからぬ影響を与えることになる。²⁴

当然のことであるが、日本のナシヨナリズムが「過熱」した時代にあつて、すべての建築が折衷主義のものであつたわけではない。²⁵モダニズムなどの新しい思潮も存在しており、それは卒業設計にも色濃く反映されてきた。

早稲田大学の卒業設計では、伝統とは無関係に、当時の先端的なデザイン思潮であつたモダニズムが専ら追求された。それは、日本を代表する建築家の佐藤功一をはじめ、佐藤武夫・今井兼次らの教授陣の存在と無関係ではない。一九四一年の『早稲田大学建築講義』を繕いてみると、病院・現代庭園・クラブ・ホテル・レストランなどの諸建築を通して、強い機能主義に裏打ちされた設計法を説いている。

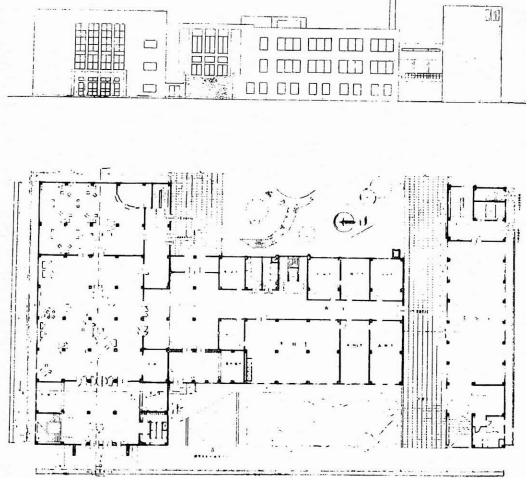
趙の設計テーマは「大陸に建つ農民会館」である（図2）。²⁶非対称的な、機能的な平面計画である。立面

を見ると、マッス（量塊）の組み合わせや、連続窓など、モダニズム建築の特徴がよく現れている。テーマから類推すると、「農民」という視点に特徴がある。後に彼は、当時の状況について、次のように述懐している。「私はわりと早い時期からマルクス、レーニン主義を受け入れた。日本の留学期間、ずっと（共産）党組織の指導を受け、学習の傍ら革命運動に従事した」²⁷。

日本のプロレタリア芸術運動は一九二〇年代後半から盛んになり、建築界にも少なからぬ影響を与えた。階級意識と技術について、最初に問題提起したのは山口文象の創宇社である。第五回展における「労働会館」案は特に左翼陣営の批評家の関心を集めた。一九三〇年、彼はベルリンのグロピウスのもとに赴き、ドイツの社会主義思想を学んでいるが、帰国後、一九三七年に日本歯科医専を世に送り出した。一方、住宅方面では、同潤会もプロレタリア住宅の建設に取り組んでいた。

こうした左翼的な思想は既に一九三〇年代初頭に弾圧されたが、潜流として生命力を保っている。趙は東京で目にした現代建築は少なかつたが、²⁸思想面におけるマルクス思想の影響は看過できない。

当時、日本でマルクス主義に感化された留学生はかなりいた。ほぼ同時期（一九三九年）に東京工業大学



大陸に建つ農民会館

趙冬日

図2 趙の設計テーマは「大陸に建つ農民会館」

応用化学科に入学した孫平化（中日友好協会会長）の回顧によれば、当時、東京には中国共産党の外郭団体があり、そのグループで回し読みしたのは、マルクス、レーニンの著作（日本語訳）を始め、永田広志の『唯物史観』、『唯物弁証法』、橋本弘毅のマルクス経済学の本四冊など、日本語の著作ばかりだったという。²⁹日本の軍国主義時代に共産主義思想の種を植えられ、戦後の中国で結実したことは興味深い。

学生の設計について、「事実、この頃の各大学、高専の卒業制作には労働者のための診療所、労働会館やアパートメントハウスといった表題を示すものが多く提出されるようになり」、³⁰趙以外にも多くの中国人留学生在が労働者に関するテーマを自ら選択していた。論者の収集した資料によれば、一九二〇年代後半から中国人留学生の設計は、その多くが公共施設や、労働者用施設であった。

他の留学生の卒業設計を見ると、陳鮫の「中華民国青年会館試案」では立面にカーテンウォールの採用（図3）、王可久の「市民図書館」も四角い箱に大きな窓（図4）、林慶豊は「山麓に建つサナトリウム」の立面にベランダを設け、水平線を強調した（図5）。日本人学生の作品も全員がモダニズムで、後に現代日本を代表する建築家となる吉阪隆正もモダニズムスタイルであった（図6）。

日本のモダニズムは戦前には冷遇されていたが、若い世代の中に着実に浸透してゆき、戦後になって大きく開花していった。一方、中国人留学生は日本を通してモダニズムの影響を受けてはい

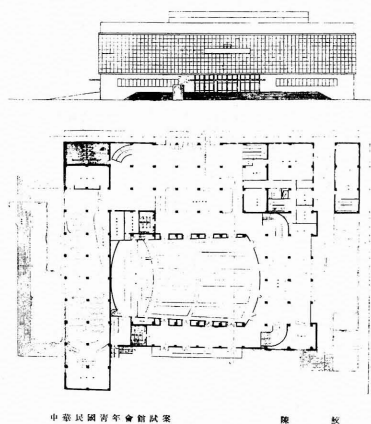
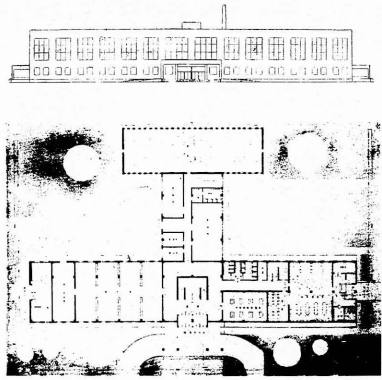


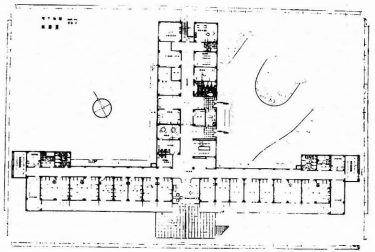
図3 陳鮫の卒業設計「中華民国青年會館試案」

たものの、戦後の中国では発展を見ることはなかった。無論、留学生にとっては、こうしたスタイルの問題とは別に、エンジニアとしての技術力の習得という重要な課題があった。とりわけ、「基礎デザイン及設計製図」・「構造及材料」・「法規」・「設備」・「施工」など、技術系の諸科目は重要な基礎力を培った。その他、一九二三年以降には、「造庭学」・「都市計画」が開設され、近代的な都市計画思想も教育された。それは趙にとっても、後年携わることになる北京の都市計画に指針を与えるものになったと思われる。



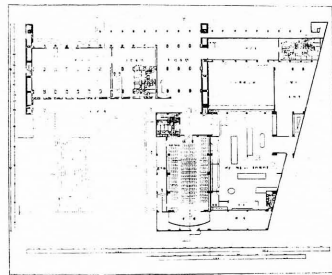
市民図書館 王可久

図4 王可久の卒業設計「市民図書館」



山麓に建つサナトリウム 林慶豊

図5 林慶豊の卒業設計「山麓に建つサナトリウム」



厚生環状に建つ中央會館 吉阪隆正

図6 吉阪隆正の卒業設計「厚生環状に建つ中央會館」

1 現代中国建築に関する研究はまだ緒についたばかりで、一九八〇年代末から徐々に報告されるようになってきた。管見では、その成果としては次のようなものが挙げられる。

龔德順・鄒德儂他『中国現代建築歴史の大綱』（天津科学技術出版社、一九八九年）

傅朝卿『中国古典的な様式の新建築——二〇世紀中国の新建築の官制化の歴史に関する研究』（台北南天書局、一九九三年）

陳志華『中国における当代建築の歴史の大綱 中国の建築における評論と展望』（天津科学技術出版社、一九八九年）

張欽楠『中国における建築創造の四〇年間 中国建築年鑑 一九八八—八九』（中国建築工業出版社、一九八九年）

劉琨『中国建築の思潮 一九四九—一九六四』（天津大学修士論文、一九八八年）、『当代建築の思潮 一九四九—一九六四』『建築師』（中国建築工業出版社、一九八九年、第三五号）

顧孟潮『当代建築文化と建築美学』（天津科学技術出版社、一九八九年）
田中淡『中国建築学界解放後のあゆみ』『建築雑誌』（日本建築学会、一九七六年一月）
尾島俊雄『現代中国の建築事情』（彰国社、一九八〇年）

姜涌『中国建築の近代化過程における建築思想の変遷（一九五〇—一九七〇年代）——建築雑誌に現れる建築家の言説の分析による』（名古屋大学博士論文、二〇〇〇年）

2 実藤恵秀『中国人日本留学史』東京くろしお出版、一九八一年。

3 一位は化学（応用化学＋工業化学）、二位は機械の順。

- 4 『早稲田大学百年史』早稲田大学大学史編集所、平成元年二月、一六―一七頁。
- 5 傅為基、須曾蔭については、『日本留学中華民国人名調』（興並院 一九四〇年 月）を参照。しかし、『稲門建築会名簿』、『会員名簿』（早稲田大学校友会、平成二年度版）にはなかった。
- 6 周継免、卒業設計は「貸事務所」、日本建築学会準員。
- 7 『早稲田建築学報』昭和一七年八月、『稲門建築会名簿』。
- 8 同上
- 9 『早稲田建築学報』（昭和一七年八月）、『稲門建築会名簿』、『中華民国当代名人録』、『建築師』（台湾、一九九五―五月）。
- 10 趙冬日『建築設計大師趙冬日作品選』北京市建築設計研究院、科学出版社、一九九八年、一五九頁。
- 11 木村時夫『日本ナシヨナリズム史論』早稲田大学出版部、一九七三年。
- 12 佐藤功一が担当していた「西洋建築史」では、講義にフレッチャーの『世界建築史』が教科書として使われていた。『早稲田大学百年史』早稲田大学大学史編集所、平成元年二月。
- 13 「理工学部建築学科学科配当表（昭和一〇―一七年）」同前、別巻Ⅱ、一六―一七頁。
- 14 拙著「日本における東洋建築史の教育の歴史と現状」『東京造形大学研究報』二〇〇一年三月、第二巻。
- 15 二〇〇〇年一月、高履泰（一九三六年東京工業大学卒、現・北京建築工學院教授）にインタビュ。
- 16 一九九一年三月一六日、趙冬日にインタビュ。
- 17 『支那建築裝飾』一九八二―八三年に補足して五冊となって、原書房に再版された。
- 18 『早稲田建築学報』第一八号、昭和一七年八月。
- 19 趙冬日「思緒・感触・希望——自述」『建築設計大師趙冬日作品選』北京市建築設計研究院 科学出版社

一九九八年、一五九頁。

20 趙冬日にインタビュー。

21 長谷川堯『日本の建築「明治・大正・昭和」』四、議事堂への系譜』三省堂、一九八一年四月。

22 鈴木博之『日本の近代』一〇、都市へ』中央公論新社、一九九九年、二八八―二九二頁。

23 『帝國議会議事堂竣工式典記録』營繕管財局、一九三七年三月二四日。

24 『建築設計大師趙冬日作品選』北京市建築設計研究院、科学出版社、一九九八年、一六〇頁。

25 井上章一『アート・キッチュ・ジャパネスク・大東亜のポストモダン』青土社、一九八七年八月。

26 同註18。

27 同註10。

28 同註10。

29 孫平化『私の履歴書』『日本経済新聞』一九九七年九月。

30 近江栄『日本の独自性の模索・喪失・回復』『日本近代建築史再考・虚構の崩壊』新建築社、一九七七年三月。

二 建築と「社会主義」、「民族主義」

趙冬日は日本でマルクス主義や、モダニズム、さらには日本のナショナリズムと接触し、如何に中国の現実と向き合うことになったのだろうか。彼の軌跡はそのまま、戦後中国の建築思想を反映しているが、中国建築における社会主義の問題をはじめ、民族主義や所謂ナショナリズムの問題については、これまで充分な

検討が行われてきたとは言い難い。そこで本稿では、趙冬日を軸として戦後中国の建築思想の問題を俎上にあげたい。

1 社会主義と「民族形式」建築

(1) 社会主義と「構成主義」、「モダニズム」

一九五三年の中国建築学会における第一回代表大会の報告書では、「この二年来、特に今年から構成主義・形式主義に反対するスローガンを提出した。なぜならこれは、帝国主義、特にアメリカ帝国主義が世界を制覇するため、『世界主義』を大義名分にして人々が民族的愛国主義における伝統および民族文化を放棄させるからである。」と構成主義、また世界主義が批判された。

ここで言うところの「構成主義」、「世界主義」とは一体、何を指しているのだろうか。

振り返って見ると、社会主義はユートピア思想に既にその根を持っていた。一九一七年のロシア革命は社会主義国家としては初めて、プロレタリアと芸術（ロシアでは欧米と同様、建築は芸術に属している）とを結び付けた。その影響はドイツ、日本など多くの国に及んだ。一九一七年の一〇月革命以後、ロシアでは新しい建設者と見なされた前衛美術家たちによって、フランスの「立体主義」(CUBISME、1907)、イタリアの「未来派」(FUTURISMO、1910)の影響を受け、「構成主義」(CONSTRUCTIVISM)が誕生した。彼らの作品は幾何学的・抽象的な基本的形態によって構成されるところに特徴があった。線、面、立体、空間など幾何学的構成や基本原色と副次色との明快な対比を用い、自然の法則を明らかにさせた。

このような理性的な芸術表現は建築にも用いられた。一九一九年、第三インターナショナルの集會が開催

されることになり、ウラディミール・タトリン (Vladimir Tatlin, 1885—1953) はこの組織の記念塔を設計した。それは、高さ三〇〇mの鋼構造物で、三つの透明な空間が吊られ、それぞれ異なった速さで軸のまわりを回転するように計画された。最大のものは、会議場を収める立方体で一年に一回転することになっている。なかほどの物は事務局が入っているピラミッド形で、月に一回転する。最上部は新聞、宣伝局をいれる円筒形で、一日に一回りする。新しい形態、目に見える構造、運動(時間)と建築の統合、そして建築全体のユートピア的な性格といったものが、ソビエトの建築再生の象徴となった。

この他、著名な構成主義建築家としては、アレクサンドル・ベスニン兄弟、モーセイ・ギンスブルク、レオニドフ、メルニコフなどが知られているが、アレクセイ・シユチュエフ設計のレーニン廟はロシア構成主義の最後の作品と言われている。

日本では、大正末期に村山知義がこの運動を推進しようとしたが、十分に根を張ることができなかった。堀口捨己、山田守らと分離派建築会を結成した石本喜久治(一八九四—一九六三)は、ソ連の国際コンペで構成主義による劇場案が当選し、建築界に驚きを与えたが、さらに日本でも、構成主義の作品・日本橋白木屋(一九二八)を世に送り出している。

中国では、ソ連構成主義の紹介は『中国建築』の創刊号(一九三一年一月)に「蘇俄政府新屋建築図様競賽」が掲載され、『新建築』(一九三七年四月)には趙平原の「蘇聯新建築之批判」を載せ、構成主義の興隆と特徴が紹介された。一九三六—三七年にかけての四期のうち、三期までの表紙は構成主義作品、第四期は蘇俄政府新屋計画図が掲載された。しかし、結局日本と同じく中国社会には受け入れられなかった。

「世界主義」は当時アメリカに流行していた「cosmopolitanism」の中国語訳で、この言葉は日本語でも「世界主義」、またコスモポリタニズムと翻訳されている。この言葉は民族・国家などの共同体を超越して、各個人を直接的に世界国家の一員とみなす立場、と解釈されている。古くはキニク学派・ストア学派などがこの考えを唱えていた。

マルクス主義は、当初から、世界主義を「金の人間」の理想として定義した。フリードリヒ・エンゲルスは、一八四五年に発表した『イギリスにおける労働階級の状態』の最終章において、資本主義のブルジョワにとつては、「この世界に存在するものは、すべてただ金のためにだけである」と指摘した²。また、マルクス・エンゲルスは一八四五年の『ドイツ・イデオロギー』で、「近代においては、自由競争と世界貿易とが偽善的なブルジョワ世界主義を生み出した」とした。

世界主義は第二次世界大戦後に再び提唱された。しかし、当時の社会主義者たちは「世界主義者にとつては、人間は、家族もなく民族もなく、伝統もなければ民族的な特殊性もない図式的な人格、『世界市民』である。反対に、マルクス主義者にとつては、人間は、特定の社会的発展、一定数の正確な条件の産物であつて、これらの条件が、かれに、一定の心的構成、特定の民族的性格を付与するのである。」と世界主義と対立する姿勢を見せた³。この言葉は今日のグローバリゼーションと類似しているという指摘もある。

建築界において、「世界主義」の思想に見合う様式を問われれば、それはモダニズムと言えようか。民族問題とは無関係に、世界中どこでも置ける。つまり、民族・国家を越えた様式と言える。

翻つて、アメリカのモダニズムはバウハウスの影響を強く受けている。バウハウスは一九一九年、ドイツの新しい首都ヴァイマルで創設された。ドイツの社会主義思想の影響を受け、バウハウスの建築様式は基盤

のしつかりした原則の上に築かれている。まず第一に、新時代の建築は労働者に奉仕する。この上なく崇高な目標、それは働くものの理想の居住空間をつくることである。第二に、新時代の建築はブルジョワのあくを全て取り除く。やがて、バウハウスの代表的人物であるグロピウス等は、ユダヤ人に対する迫害を逃れるためアメリカに亡命し、同時にバウハウスの建築様式をアメリカに持ち込んだのである。

このように見てくると、戦後中国で批判された「構成主義」、「世界主義」——具体的な建築様式はモダニズム、はいずれもかつて社会主義と密接に関係している建築様式であったが、時代の流れと共に、社会主義の建築様式は変貌を遂げていったと考えられる。

一九二四年、レーニンの死後、社会主義建築様式の転義が行われた。トロツキーとスターリンの間に主導権争いが生じ、一九二九年のトロツキーの追放により革命的ロシアは終焉を迎えた。一方、スターリンは第一次五ヶ年計画を導入した（一九二八—三二）が、それは国内資源の開発や、地域開発、産業の再配置を目的とした大規模な計画であった。

構成主義は抽象的で形態主義的に過ぎたため、左翼であると非難された。やがて、構成主義は社会主義のリアリズムへと変容した。リアリズムは以前から存在していたが、プロレタリア・リアリズムはブルジョア・リアリズムとは異なり、第一に、自然ではなく社会に目を向け、生物的な抽象人としての個人の無思想的経験ではなく、社会的現実の人として全心理、イデオロギー的経験を表現する。主要な対象は社会であり、根本テーマは階級闘争であり、またプロレタリアートのヒロイズムである。

一九二九年、ソ連における最初のプロレタリア建築組織VOPRA (All-Russian Association of

Proletarian Architects) が創設されているが、彼らは次のように述べている。⁵

「私たちの目的はプロレタリア階級の建築のため、また、技術と形式を建築に統一するため、さらに、大衆の闘争と仕事を促進する光榮な建築のためなのである」。

抽象的ではあるが、「プロレタリア階級の建築のため」であることが強調されている。

一九三七年には、ソ連建築家第一回代表大会において、社会主義リアリズムがソ連建築の基本的な方法であることが明確にされた。⁶

「建築領域における社会主義者のリアリズムとは、思想的內容および芸術表現の眞実性と、技術・文化・社会など、すべての要求を満足させる建築を創造する決意とを結合させることを示している」。

社会主義のリアリズムは幅広く影響を与え、文学をはじめ、絵画・彫刻などに反映している。さらにその影響は日本に、無論、中国にも及んだ。

一九四二年、毛沢東は「延安文芸工作座談会における講話」⁷を行い、そこで芸術とプロレタリア階級との關係を論じている。具体的には、以下のような内容を柱としていた。

① 芸術は人民大衆のための芸術であること。

② 芸術性を高め、普及を図ることは工農兵のためである。抽象的な内容に反対し、自然形態のものは「最も活力があり、最も豊かで、最も基本的」、芸術の源泉と論じた。芸術家は工農兵の中へ、闘争の中へ、さらに最も豊かな源泉へと導く創造の材料を探求しなければならない。

③ 共産党内關係の問題、芸術路線と共産党総体との關係、他党との關係、党の芸術と非党の芸術との關係——芸術統一戦線の問題。その中でも、特に強調していたのは、「階級があり、党がある社会の中で

は、芸術は階級に服従し、党にも服従する。当然、階級と党の政治的要求に服従しなければならない。一定の革命期における任務に服従する必要がある。ここから離れたら、群衆の根本的必要から離れたものとなる。」

この毛沢東のスピーチは、戦後中国におけるすべての芸術創造における基本方針となっていた。

中国美術のリアリズムは早く、一九三〇―四〇年代から始まっている。中国の四つの最も影響力がある美術学校⁸の担当者はフランスに留学、写実的な基礎教育が良く、リアリズムの基礎を作った。日中戦争中、プロレタリア・リアリズムの内容が始まり、戦後までも続いた。

しかし、建築におけるリアリズムとは、一体何であろうか。彫刻、絵画については理解しやすいが、建築は難しい面がある。ソ連はまた見本を造った。ソ連では一九三二年にソビエト宮の設計コンペが始まり、国内外を含む二五〇の図案が出された。構成主義建築家のアレクサンデル・ベスニンも参加したが、結局、一九三四年にボリス・イオフアン等の巨大かつ古典折衷様式の建築が当選した(図7)。

このコンペはソ連の設計思想の転換点とも言われ、民族形式が始まった。また実際の作品については、イヴァン・ツォルトフスキーにより設計された住宅(一九三四)、アレクセイ・シユチュューゼフらが設

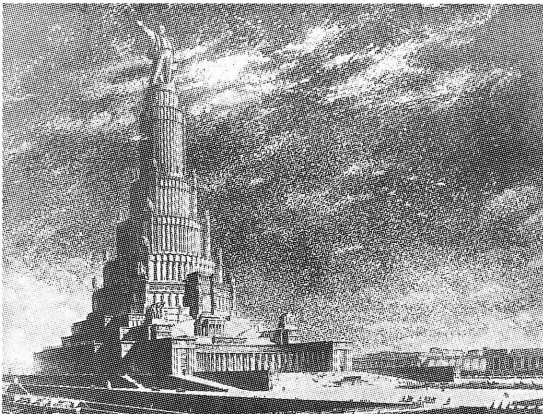


図7 ソビエト宮、1930年代、Boris Iofanなど

計したMoskva Hotel（一九三二—三三）、アラビヤンが設計した赤軍劇場（一九三五—四〇）など、古典折衷主義的なものである。社会主義リアリズム思想と共に、伝統的で記念碑的なものを促進した。リアリズムとナシヨナリズムを結びつけた。それは戦後になって、中国建築の一つの手本となった。

一方、モダニズムは戦後アメリカの世界主義の象徴と見なされていたため、冷戦期には社会主義の様式として決して採用されることのない様式となっていた。

（2）「民族的な形式、社会主義の内容」

解放後、建築にいち早く「民族形式」という言葉が公式に使われたのは、一九五二年一〇月三〇日に発表された建設部長・劉秀峰の「基本建設の仕事の指導を強化する」の中においてである。¹⁰

「都市建築の建設には、経済、適用、丈夫、美観以外に、可能ならば民族形式に満足する。価値がある文化史跡を保存する。」（傍点論者）

引き続き、一九五三年にはソ連の専門家が招聘され、清華大学で講演会が開かれた。その時、社会主義の現実主義（リアリズム）、構成主義などの概念が中国に紹介された。同年、中国建築学会第一回代表大会では、ソ連の社会主義の現実主義が検討された。建築史家の梁思成は「建築芸術中の社会主義現実主義の問題」をテーマにして、建築の社会主義問題と現実主義問題を結びつけた。また、彼は毛沢東の「新民主主義論」の話を引用し、「中国文化は独自の形式を持つべきである。これこそ民族的な形式である。民族の形式、新民主主義の内容——これこそ、私たちの今日の新文化である¹¹」とした。

毛沢東は一九四〇年一月に発表した「新民主主義論」において、既にスターリンの思想を受け続け、民族形式と新民主主義とを結びつけていた。

さて、後に中国建築を方向付けることになる「民族的な形式、社会主義の内容」というスローガンは、一九五四年に発表された梁思成の「祖国の建築」の中に最も早く見られる。

「過去四年の間に、人々は建築の民族性について多くの異なる意見を持つに至った。しかし最近、皆さんは勉強、検討、またソ連の専門家が熱心にソ連の経験を紹介してくれたことにより、我々の認識が統一されてきた。今日、我々は我が建築もソ連及びその他の民主国家の道路に及ぶ必要がある、と認識している。すなわち、『民族的な形式、社会主義の内容』の路線を歩む。世界主義のツルピカのガラス箱を捨てる¹²」。

このスローガンには幾つか問わなければならない問題が内包されている。

第一に、「社会主義」と「民族主義」との関係。

第二に、「民族的な形式、社会主義の内容」という概念の出処。

第三に、多民族共存社会（中国）における「民族的な形式」。

「社会主義」と「民族主義」との関係

社会主義はもともとインターナショナルな思想を母体とした産物であつて、ナショナルなものを母体としてはいない。『共産党宣言』では、「労働者たちには如何なる祖国もない¹³」ことが強調されている。マルクス研究家デーヴィスは、その内容については三通りの解釈があり得ると言っている。

まず第一に、資本主義のもとではプロレタリアはひどく踏みにじられ、墮落させられているので、全く如

何なる国民的文化をも吸収することができず、いわんや發展させたりすることはできない、という意味にとれる。

第二に、「労働者たちは国を支配するか、少なくとも国の支配の發言権をもつようになるまでは、どんな利害關係をも国は持つていない」という意味にとれる。

第三に、階級意識を持った労働者には国籍はない。¹⁴

つまり、マルクスはナシヨナリズムと社会主義との関連性については直接的には論じなかつた。

レーニンは有名な論文『帝國主義 資本主義の最高段階』及び『国家と革命』において、民族およびナシヨナリズムについての理論を直接には含んでいないが、しかしそうした理論を含蓄するのであつて、それゆえ、マルクスは民族問題を取り扱ふことができなかつたということに対する批判になるとしている。

さらにレーニンは、一九一四年に『民族自決権について』を發表しているが、そこで彼は民族自決權利を支持し、帝國主義に対する抵抗も支持している。¹⁵それは、プロレタリアにおける民族觀の変化である。しかし、「嚴密な意味で民族理論というものをレーニンは持つていた訳ではない」という批判もある。¹⁶

スターリンは基本的にレーニンの思想を受け継いでいる。スターリン自身の民族觀については、三つの論文が發表されている。それは「マルクス主義と民族問題」(一九一三年)、「民族問題とレーニン主義」(一九二九年)、「言語学におけるマルクス主義について」(一九五〇年)である。¹⁷

「民族問題とレーニン主義」ではプロレタリアの諸民族の發展段階を説明した。ここでは、ナロード(人民)、もしくは、ナロードノスチと言われるものとナーツィヤ(民族)との連関の問題が意識されているばかりではなく、ブルジョアの民族と社会主義的民族という発想が打ち出されてきて、民族を歴史的に形成し

ていく階級主体の観点が一層はつきりと示されている。

スターリンは民族の将来と民族語の将来を論述したとき、社会主義の民族と民族語の行方を三つの発展段階で区分した。第一段階は、これまで圧迫されていた諸民族と民族語とが発展し繁栄する段階、民族の同権が確立される段階、民族の相互の不信が一掃される段階、諸民族間に国際的な結びつきが組織され強化される段階、であろう。第二段階で、資本主義の世界経済にかわって単一社会主義的世界経済が形成されていくにつれて、共通語のようなものが形成されはじめるであろう。第三段階で、世界的な社会主義的経済制度が十分に強固になり、社会主義が諸民族の日常生活にはいりこみ、諸民族が、民族語にまさっている共通語の長所を実際に確信するようになるとき、民族的差異と民族語とは、共通な世界語に席をゆずりつつ死滅しはじめるであろう、と予想した。¹⁸

このように社会主義の民族理論が成長し、特にスターリン時代における民族観の成長と共に、建築の変化が見られる。結果、レーニン時代の構成主義は廃棄されることになる。

「民族的な形式、社会主義の内容」という概念の出处

スターリンの民族観と文化芸術との結合については一九二五年に発表された『東方人民大学の政治的任務について』の中で論じられている。¹⁹

「われわれはプロレタリア文化を建設しつつある。これはまったく正しい。しかし、その内容において社会主義的なプロレタリア文化が、社会主義建設にひきいれられたさまざまな民族のもとで、言語や生

活様式などの相違によって、さまざまな表現形式や表現方法をとるということもまた正しい。内容においてはプロレタリア的な、形式においては民族的な、——これが社会主義のめざす全人類的な文化である。プロレタリア文化は民族文化を廃止するものではなく、それに内容をあたえる。そして逆に、民族文化は、プロレタリア文化を廃止するのではなく、それに形式をあたえる」。

ここでスターリンは、民族文化とプロレタリア文化とを結びつけているが、この思想は中国に受け継がれ、前述した毛沢東の「新民主主義論」（一九四〇年）にはその影響が窺える。

一九四九年の中華人民共和国の成立は、階級の観点からすれば、プロレタリア階級がブルジョワ階級に勝利したことである。また民族の観点からすれば、第二次世界大戦後のアジア・アフリカの植民地解放と民族独立の達成であり、主権国家建設を絶対的善と見なす視点に立てば、反帝闘争に対する輝かしい勝利と言える。近代以降、中国人は「nation」に対しての認識が大きな頂点である。建築については再び民族様式が復興された。しかしながら、一九二七年の国民政府の成立以後、建築の民族形式の復興と比較すると、プロレタリア階級が強調されている。

多民族共存社会（中国）における「民族的な形式」

ここで考えるべきは、中国は多民族によって構成されており、建築様式も自ずと多様化は免れず、どの民族の様式が中華民族を代表できるのかという問題である。

梁思成は「中国建築の特徴」の中で、中国建築の様式問題について、九点にわたりその特徴を纏めている。²⁰

いずれも、漢民族の建築様式の特徴であったが、漢民族と少数民族との関係を如何に認識しているかについて、「これらの地区（少数民族）の建築は中国中心地の建築と同じシステムであるか、あるいは大きな違いがなく、兄弟のように同じ家族の関係にある」とした。

この思想は中国近・現代の民族政策を反映している。一九三七年以後、共産党は「全民族の共同抗日」、「全民族の統一戦線」を呼びかけていた。「全民族」という言葉を如何に理解するかについて、一九三八年八月に発表された楊松の「民族を論ず」と題する論文がある。²¹この論文は、同年一〇月の毛沢東の「新段階を論ず」にあらわれる民族論に決定的根拠を与えた。²²

この論文は少数民族と漢民族との同化を強調し、「既に同化した満人、回人、番人、苗人、蒙古人、黎人などの経済生活、言語、風俗、習慣などは、すでに漢人に同化し、漢人と雑居し、構成民族の特徴を失っているが、習慣は漢人とは幾分か異なっている。彼らはすでに元々の種族ではなく、また漢人でもない、彼らは新たに近代民族——中華民族を形成しているのである」とした。

この一体化された「中華民族」の概念は、中国建築の理念にも影響を与えた。つまり、「漢民族」の建築的特徴を「中国」（中華民族とも言える）の建築的特徴と見なしたのである。戦前には、中国における中国建築の研究は少数民族の建築にほとんど論究されなかったが、その影響は戦後にまで及んだ。

しかし、ここで一体化された「中華民族」はネーション集団に当たるもので、エスニック集団ではなかった。異なる文化を持つてゐることを特徴としたエスニック集団は、ネーション集団を強く強調することによって弱められ、結果、「漢民族」の建築様式は「中華民族」の「代弁者」となった。

一九四九年以後、中国の社会主義民族政策は多民族の共存（五六個民族）が認められ、一九五四年の憲法

では、民族間の差別と抑圧を禁止し、平等を実現する（第三条）とした。また経済援助も行われた。スターリンの思想に依れば、共産主義の最後の目標は、民族の差異を無くすことにある。そのため、各民族の芸術の個性（差異性）を強調するのではなく、階級の区分による、民族の団結、反帝国主義が主たる目標となった。

一九五一年一二月、毛沢東は次のような声明を発表した。²³

「帝国主義が過去あえて中国をあなどった原因の一つは、中国の各民族が団結していないことであつた。しかしこのような時代は既に永遠に過去のものとなつた。中華人民共和国が成立したその日から、中国各民族は団結して友愛協力による大家庭をなすものとなり始めた。こうしていかなる帝国主義の侵略にも充分うち勝つことができるとともに、わが祖国を繁栄した強国に建設しうるのである」。

また、一九五二年八月に採択した「民族区域自治実施要綱」は、「民族自治権」を否定したものであることを明言したのである。このような民族の分離権と連邦制が認められなかつたのは、ソ連の民族政策との違いである。²⁴同時に、少数民族の中に、漢民族と同じく階級闘争（土地改革）が展開された。

こうした民族政策は建築の方面にも反映している。梁思成は『祖国の建築』に「建築は民族性を持っている」と発言した。「モスクワ大学はロシア伝統から発展してきたので、ロシア民族様式である。ソ連の他の共和国で、我々が見たのはその他の民族様式である。これは我々が明確に社会主義の建築が民族性を持っていることを認識させた」。²⁵

しかし、中国建築については、再び漢民族の建築的特徴が強調された。つまり、中国建築界では、ソ連より一層、一民族を強調していることが窺える。その結果として、一九五〇年代の中国建築は、日中戦争時に

おける「ネーション」の強調と共に「エスニティ」が弱められた状況に、類似性を持つようになった。

当時の代表的な作品は友誼賓館（一九五四年、張鏞）（図8）である。この作品は一九五〇年代前半の中国建築の民族思想の反映である。漢民族様式の大きな屋根を冠している。しかしながら、建築は絵画や文学とは異なり、表現範囲が限られているため、「階級」という社会主義の内容を表現するには至らず、ナショナルリズムの気味が大変強くなった。その結果として、一九三〇年代の中国の古典復興や、また一九三〇年代の軍人会館と類似したものになった。

（3）趙冬日の作品に現れた「民族形式」と「社会主義内容」その一
——伊東忠太の「折衷主義」或いは中国の「民族形式」？

趙冬日は一九四一年の帰国後、暫くの間（一九四一—一九四九）、建築作品は手掛けていなかったが、華北交通株式会社、北平大学工学院建築系教授、東北大学建築系教授・系主任、北洋大学建築系教授、河北省高等工業職業学校校長などを歴任し、改めて共産主義思想を吸収した。彼は社会的身分を利用して、早い時期に共産党の地下活動を行った。ちなみに、後の北京市委員会の副書記、建設部の責任者・劉仁²⁶など、革命リーダーと交わり、政治力を有する建築家となった。それは、後年の彼の仕事に非常に有効に働いた。

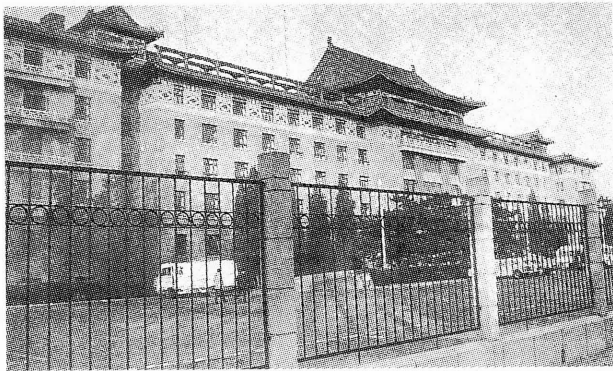


図8 友誼賓館、1954年、張鏞設計

一九四九年以後、中国の主要課題は経済回復である。一九五〇年からソ連の専門家を雇い入れたが、最初の一六組は毛沢東・周恩来がソ連を訪問する際、招聘した。二回目の三組は朝鮮戦争の後、北満基地を建設するため招聘した。三回目の二三組は一九五一年に招聘した。中国の経済発展の過渡期において、外国の援助は欠かせない。

中国の技術者不足の中、趙冬日は弱冠三六歳で重要な仕事を任された。

一九五〇年に北京建設局計画処の副処長、一九五三年に北京建築専科學校副学長（一九五五）、一九五四年には北京市建築設計院總工程師を兼任し、その後、北京市計画局主任となり、北京市全体計画の責任者となった。一九五七年に共産党に入党すると、北京市城市計画管理局總建築師、城市計画委員会顧問となった。つまり、首都建設に関わる重要ポストである。それは、彼が共産党からの信頼を得た「又紅又專」（社会主義思想をもつ優秀な技術者）建築家であったことと無縁ではない。解放前から地下活動に参加し、その際、劉仁の知己を得ているが、このことが後に、以下のように、北京市委員会ビルをはじめ、中央政府や北京市の重要建築の設計に繋がっていったのである。

一九五四年 中央直屬機關礼堂（図9）

解放後の北京における最初の会議場と劇場の兼用建築。

一九五四年 北京同仁医院（図10）



図9 中央直屬機關礼堂、1954年



図10 北京同仁医院、1954年

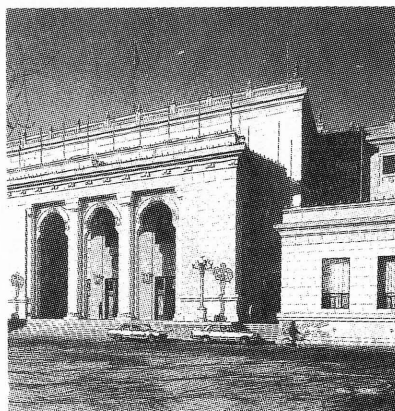


図11 全国政治協商會議ホール、1955年



図12 北京市委員会ビル、1955年

北京の著名な眼科病院。

一九五五年 全国政治協商會議ホール (図11)

全国政治協商會議の重要會議が開催される場所。

一九五五年 北京市委員会ビル (図12)

北京市委員会事務所。劉仁はこの建築を高く評価し、人民大会堂の設計を依頼したとも言われる。

一九五六年 社会主義学院

民主人士、ブルジョア分子の思想改造のため、社会主義理論の教育の場として設立された。

一九五七年 北京イスラム教経学院（図13）・08倶楽部・民族事務委員会住宅

このように見てくると、趙は五〇年代半ばには、中国の社会に確固たる地歩を築いていたと言える。

さて次に、作品ごとに、その建築様式を分析してみたい。

まず、一九五四年の二作品を見ると、ここでは漢民族のモチーフが用いられている。この出発点については、梁思成と類似している。中央直属機関礼堂は伝統的な漢代闕形式を採用

し、また北京同仁医院は漢民族様式でまとめている。いずれも、「大屋根」は回避され、軒部分の装飾で「民族形式」を表現するに止めている。しかし、基本的な思想は当時の中国で提唱された民族形式と一致している。

一九五五年に完成した全国政治協商会議ホールでは、折衷的な様式が導入されている。このホールでは、一見、西洋のオーダーを想起させるが、柱頭には漢式の大斗を用い、礎盤には蓮のモチーフ、イスラム風のアーチ、陸屋根、中国の高欄など、東洋のディテールが随所に用いられている。中央直属機関礼堂よりさらに豊かな「民族」的内容を表現している。

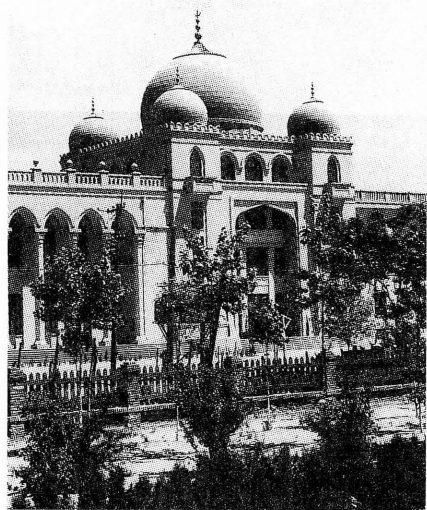


図13 北京イスラム教経学院のディテール

一方、北京市委員会ビルでは、ローマ式のアーチを採用、西洋的な趣向が凝らされている。

五つのイスラム風ドームが特徴的な北京イスラム教経学院では、インドのタージ・マハールのモスクを想起させるデザインを採用している。ここでは、イスラム建築に見られる幾何学文様がモチーフとして使われているが（図14）、単純なコピーではなく、現代的にアレンジされたイスラム風建築となっている。

ここで、趙のイスラム風建築のデザインを考えるうえで、多民族の建築の認識について問う必要があるであらう。

一九八九年に書かれた「私の中国建築に対する理解と展望」『中国建築評析と展望』（一九八九年）のなかで、趙は建築の民族性について論じている。そこでは、生活様式について、四合院という漢民族の生活様式を論じ、思想体系については儒教を背景とした「等級性」という漢民族の建築的特徴を論じた。また、中国建築を記述する際の特徴については梁思成と一致している。つまり、多民族の建築様式については触れていない。当時、この問題は建築家個人では容易に解決できない問題であった。

趙はどこで、イスラム建築に関する知見を得たのだろうか。中国では、イスラム建築は中原に入ると、ほとんど漢民族の様式に同化されている。建築様式は漢族の様式で、内部装飾の一部にイスラム様式が見られ

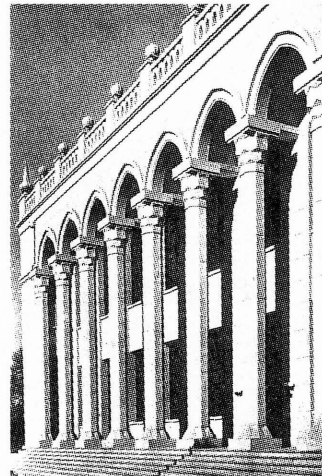


図14 北京イスラム教経学院、1957年

る程度である。つまり、国内の建築にその好個の実例はないと言つてよく、さらに、戦前の中国建築研究者が殆ど研究していない領域でもあった。趙個人は明言していないが、早稲田大学での東洋建築史教育の影響ではないかと推察される。

伊東忠太は一八九三年、東京美術学校で東洋建築史を教えていた時、既にインド建築の裝飾についても講義を行つていた。その後、一九〇三年にはインドでフィールドワークを行い、第一次資料を収集した。彼の『印度建築史』²⁷には、多くのイスラム建築に関する詳細図が描かれている。また、彼は中国風、印度風、イスラム風などを加味した特異な東洋趣味の作品を世に送つた建築家でもあった。印度風の作品としては、一九三四年に完成した築地本願寺が有名である。

趙にとつては、伊東忠太の影響は東洋建築の講義だけではなく、折衷主義建築の設計手法そのものも含まれる。つまり、趙が珍しい民族様式（厳密に言えば折衷主義的なデザイン）を採用したのは、彼の日本の留学経験と無縁ではないと推察できる。なぜなら、彼の作品の特徴は他の建築家の作品には見られない特異性を持つてるのである。

とは言え、趙の作品は伊東忠太の折衷主義とイコールではない。社会主義の民族形式を表現したいという戦後の中国の事情は日本には全くなかつた。趙が日本で学んだことを中国の民族形式の時代的潮流に融合させたことは文化コンタクトの結果であろう。

しかしながら、何故、イスラム経学院のようなイスラム風建築が建てられたのだろうか。思うにそれは、当時の中国における民族政策と関係していよう。

一九四九—一九五七年の間は、中国では、民族政策の「穩歩期」²⁸と言われる。この時期は内政一般と同様

に、穏歩政策が採られた。(一) 差別の禁止と政治的平等の法制化、(二) 幹部・言語・文化の「民族化」の推進、(三) 大漢族主義批判、(四) 緩やかな社会改革と重点的工業化、の四つを柱に、少数民族およびその領域の新体制への統合を最優先した。

この「民族化」政策は、一九五〇年一月に「少数民族幹部養成試行方案」「中央民族学院設立試行方案」が決定されると、まず民族幹部の養成から始められた。建国初期に一万二〇〇〇人に過ぎなかった少数民族幹部は、一九五八年には四八万人に上り、モンゴル族以外には存在しなかった少数民族黨員も、一九五七年末には四〇万人にのぼった。当時、「幹部の民族化を基本的に実現した」²⁹とその実現力を誇示した程である。

また、「大漢族主義」の批判については、一九五二年の全国各少数民族地区で民族政策の実施状況についての大検査が行われ、その結果、一部の漢民族幹部と漢民族民衆の間にかなり重大な「大漢族主義の思想」が存在することが明らかになった。上述したように、建築学界でも梁思成の中国建築に関する認識には漢民族を強調する傾向が現れている。その結果、一九五二年、民主改革である土地改革においては同時に大漢族主義に対する批判を並行的に行ったため、比較的穏健な改革として進められた。

この様な状況の中で、建築様式に少数民族 (ethnic minorities) の様式を強調することは有利に働く。しかし、当時、少数民族の建築様式は多くはなく、社会主義下においては、民族の主体性よりも、階級の問題が優位にあると考えられる。³⁰

中国イスラム教経学院は中央民族学院と同じく民族幹部養成のための機関であり、共産党委員会事務所・共産主義青年団事務所を設置は、当時の少数民族の中にあつては、社会主義化することを意味している。各民族の主体性に立脚した多民族様式の研究体制ではなかったため、少数民族の様式を強調するのは一時的な

ものである。

趙冬日は多民族化の問題を考慮して作品を創ったとは言えないが、許される範囲で多様な建築様式を取り入れたのは独自の手法と言えよう。また、伊東忠太の折衷主義は戦後の日本では幕を下ろしたが、彼の地で延命していく様子は、アジアにおけるナシヨナリズムの特異な消長を物語っていて、興味深い。

2 社会主義の経済と「民族形式」との矛盾

(1) 「実用・経済、可能性としての美観」の提唱

一九五二年、建築工業部党組は設計問題について、「設計方針は必ず適用、安全、経済の原則を注意しなければならぬ、しかも国家経済条件が可能ならば、適切な建築外形の美観を考える。単純に美観だけ追求する誤る考え方を克服する」と提出した。³¹

解放後、中国の住宅不足問題は深刻の度を増していた。とりわけ、都市部では戦前の消費都市から工業都市に移行する際、労働者の住宅問題はいや増していた。「中共北京市委関与（北）京市建房問題の報告」³²によれば、一九五一年の北京市城内には一〇〇万戸の住宅があるが、その内、機関・軍隊が二二万戸を使用していた。しかも、状態の良いものが優先的に選ばれた。低収入の一般市民（労働者、機関職員、教員）にとって、家賃は給料の四〇％以上になるケースもあり、その不満は急速に募っていった。

この問題を解決するため、大量の住宅が建設された。一九五三年、国家が直接投資した建築は、延べ床面積三〇〇万㎡に上ったが、そのうち住宅は一二〇〇万㎡を占めた。住宅の基準は当時の状況に鑑み、国营企業の職員住宅は一人当たり四㎡であった。³³

しかし一方、「民族的な形式、社会主義の内容」の提唱と共に、社会主義のプロレタリアートの要求と民族様式との矛盾はさらに著しいものとなった。一九五三年にスターリンが没すると、翌年、ソ連共産党中央委員会と部長会議は全ソ連建築者会議を開催した。会議は七日間に亘って開かれ、参加者は延べ二二〇〇人にのぼった。この会議に中国は代表団を派遣した。そこでフルシチョフは、「建築においては、広い範囲で工業化を導入し、質の改善とともに、コストを削減する」必要性を訴え、建築界の復古主義、形式主義を激しく批判した。この発言は、中国の変化も促した。

中国では、一九五五年に反浪費運動が起り、「実用・経済、可能性としての美観」のスローガンが再度提出された。三月二八日には、機関紙『人民日報』において、「建築中の浪費現象を反対する」が発表され、浪費の二大要因が指摘された。一つは「形式主義」、「復古主義」である。「形式主義」は従来から批判されてきた「構成主義」と「モダニズム」であり、「復古主義」は「民族形式」を指している。もう一つは、標準化されていない建築工事のことである。例えば、国家軍事委員会の建物は瑠璃大屋根を使ったため、二四五万元（旧幣）を費やしたが、これは一般瓦屋根の一〇倍に相当する。瑠璃大屋根を採用した一二件の建物では、都合五〇〇億元を浪費したとしている。³⁴

この反浪費運動と共に、中国の建築美学が困惑状態に陥った。一九五五年に展開された反浪費運動は、建築における「美」という側面を否認する傾向を助長した。

「建築中の浪費現象を反対する」は、「美観だけで実用性がなければ、非重要な利益のために重要な利益を捨てると言う意味になる」³⁵とされ、「美」は「経済」に比べれば、「非重要」のものであると断じた。またそこでは、建国初期における、「適切な建築外形の美観を考える」と対比すると、経済と美観の対立が明

確に読み取れる。

こうして、スターリン時代から続いたプロレタリア建築美学としての「民族形式」が批判されるに至り、元来、プロレタリアの新建築であったモダニズムや構成主義も含め、その美学的思想のバックボーンは抜け落ちてしまった。その結果として、極端な節約建築が誕生した。建築コストは軒並み圧縮され、友誼賓館は一m当たり二九〇元から一六〇元に、事務所建築は一〇〇元から四五―七五元に、また住宅建築は九〇元から二〇―六〇元に抑えられた。³⁶さらに、文化大革命以後、過度の経済性の強調により、殷商時代に使われ始めた版築工法も出現したのである。

(2) 趙冬日の作品に現れた「民族形式」と「社会主義内容」その二——近隣住区論の応用と住宅の計画に表現したローコスト

一九五五年の反浪費運動で、住宅の建設にまず関わった問題である。趙は以上の折衷建築を設計すると共に、住宅区及び住宅の設計提案を出した。一九五七年二月に「北京市北郊一居住区の計画図案と住宅設計」³⁷を発表、一九五八年一月には「北京市白紙坊居住団地の改造計画図案」³⁸を発表した。

住宅区の建設に民族形式の応用は見られないが、社会主義建築のもう一つの面が反映されている。すなわち、モダニズムの延長線である。

趙が設計した北京市の二つの住宅区は、いずれも「近隣住区」の思想を導入したと考えられる。

「近隣住区」(Neighborhood Unit) はアメリカのペリー³⁹によって提唱された概念である。「近隣住区」の思想の誕生は社会改良事業と関係している。ロンドンの貧民街のセツルメント運動から発展したコミュニテ

イ・センター運動が、アメリカでも一九一〇年代に入って盛んになった。コミユニティ・センター運動はセツルメント運動からその理念として、「近隣の回復」の重要性を受け継いだのである。

「近隣住区」は割と早く中国に影響を与えた。一例として、一九三七年の成都の新村計画にその影響を窺うことができる。ここでは、初期の「近隣住区」は現在の中国語訳となる「隣里単位」を使わず、「新村」と名を付けられた。因みに、この名称は武者小路実篤の「新しき村」からの借用とも考えられる。一九四七年の重慶の新村計画は、ペリーの「近隣住区」により近い。さらに、日本人による一九三八年の「大同計画」、一九三八―四二年にかけて計画された北京西郊外における計画では、「近隣住区」の概念が導入された。

しかしながら、「近隣住区」と一口に言っても、国によつて、そのサービスの対象は異なる。ロンドンでは、スラムの貧困者をその対象にしていたが、アメリカでは郊外の中産階級を対象とするものであったし、中国の「新村」は同じ中産階級を、また、「北京西郊計画」は日本人および関係中国人を対象にした。

戦後、中国では、「近隣住区」の思想は「居住小区」と名を変え、社会主義と連動した動きを見せる。「近隣住区」は建築における「モダニズム」と通底する立場にあったが、「居住小区」という名称が米国発の「近隣住区」理論を薄めさせ、「モダニズム」ほど攻撃の声は上がらなかった⁴⁰。

趙は留学時代、都市計画に関する基礎的教育は受けていたようである。『早稲田大学建築講義』⁴¹には、「現代都市計画」が盛り込まれており、それは同時に、当時趙が受けた都市計画教育の具体的内容を示している。一九四一年に帰国した時には、北京の都市計画は進行中であり、華北建築学会の機関誌『華北建築』にも掲載され、広い範囲で知られていた。

ペリーの「近隣住区」と比較すると、趙の北京地壇の計画に与えた影響を見て取れる。地壇住宅区の計画では、趙は次のように考えていた。⁴²

住宅区の総面積は三四haにのぼり、そこに一万八〇〇〇人が居住する。住宅区は四つに区分され、併せて、各種公共施設が設置されている。(図15)

- ① 交通…主要道路の東は雍和宮から郊外に延長した道路と結ばれ、西は北小街から郊外へ延長した道路と結ばれる。住宅区内の二方向の道路が交叉しており、城内で仕事をしている人にとっても、西郊外で仕事をしている人にとっても便利である。
- ② 緑地…子供の施設、小・中学校、クラブ、運動場、診療所など、密度が低い建築を集中させ、緑地を設ける。各住宅前には小規模の緑地を計画し、街路樹と共に緑地システムをつくる。
- ③ 建築…建物の配置は、可能な限り日照の悪い方向、騒音を避ける。公共建築と共に、全体的な建築群を構成する。また、北京の「胡同」の配置形式を参考にして人民の生活習慣に近づける。
- ④ クラブ…クラブは中心的建築であり、住民の集会・娯楽などの活動の拠点である。東西軸と南北軸の交差点に設置させ、各住民に適切な距離を置く。近くには広場や緑地を設け、住民に良好な居住環境を整備する。
- ⑤ 保育園(託児所と幼稚園)…道路に近い緑地に設置されている。子供の生活環境と遊び環境を備え、送迎にも便利である。必要に応じて託児所と幼稚園を各二カ所設置する。
- ⑥ 診療所…診療所は南北軸の北に設ける。ここは住民が少ないため、静かである。
- ⑦ 生活用品商店…主要道路の両側の建築の中に設置する。各住民からの距離は二〇〇m前後とする。

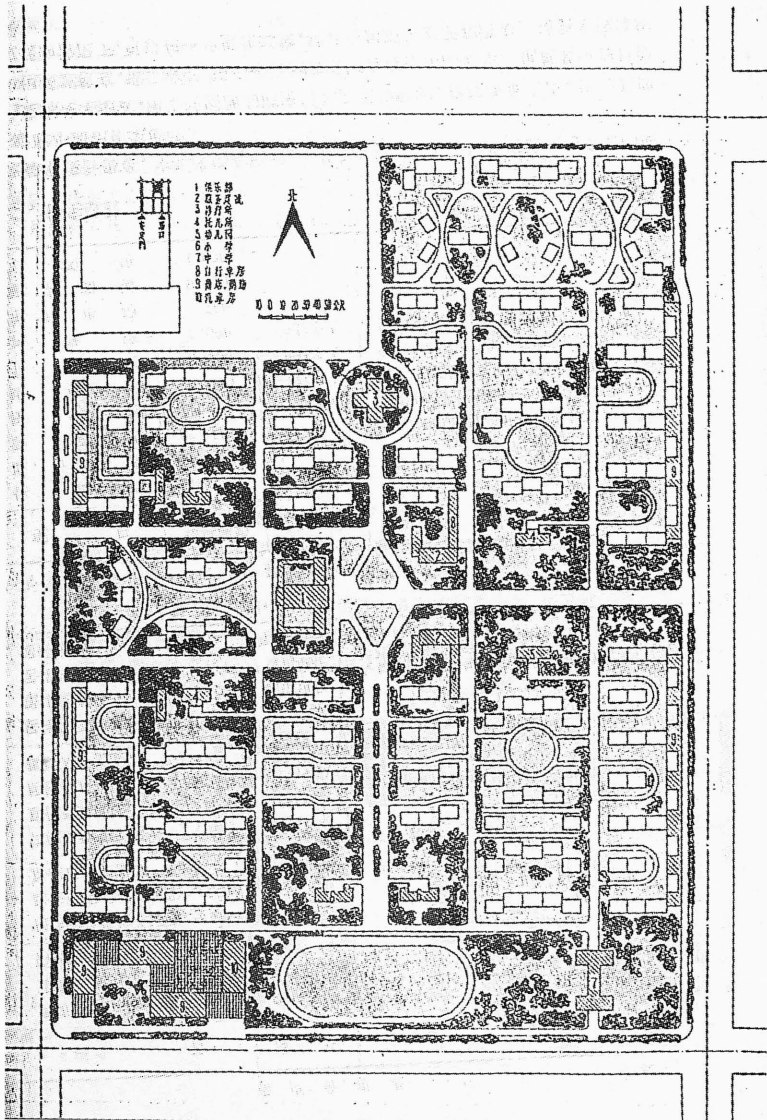


図15 地壇住宅区の配置図

⑧ マーケット・住宅区の周辺には、大きな商店がないため不便である。この問題を解決するため、西南隅に大きな総合マーケットを設置し、周囲一・五kmの住民の必要を満たす。

⑨ 学校・南北軸線の南に二つの小学校と一つの中学校を集中配置する。これにより、共用施設、例えば運動場を共同利用できるようになる。

地壇住宅区計画は「近隣住区」という言葉自体は使われていないが、ペリーが提出した要素が全て含まれている。交通問題、オープン・スペース、公共施設、商店などが取り入れられた⁴³。具体的な建築については、当時の状況を踏まえて設計されており、とりわけ、反浪費運動の影響が窺われる。

元来、中国では、三代同堂（祖父母・夫婦・子供の三代が同居）という伝統があつた。解放後、深刻な住宅不足により、一九五二年六月二日に中央財政経済委員会は、住宅面積を一人当たり四m²と決定した。その結果、三代が同一の部屋に同居する状況が数多く発生した。また、中国では結婚が比較的に早いため、成長した子供と同居する現象も少なくない。しかしながら、プライバシー保護の観点から、こうした家族単位の住宅タイプが標準設計として採用される契機となつた。

当時、北京では住宅の標準設計には大きく二つのタイプがあつた。一つは内廊下タイプで、もう一つは外廊下タイプであつた。この二タイプとも問題が存在している。内廊下タイプは、トイレが廊下に面しており、換気がよくない。外廊下タイプについては、部屋的面積が一家族のために設計されているので、大きくできない。そうすると、廊下（サービス面積）について不合理な点が存在している。効率的な住宅の設計は当時の重要課題である。趙が採用したのは、一九五六年に北京市建築設計院が設計した乙型実験住宅である（図

16)。この図案は基本的に国家計画委員会の要求に応じて、一人当たり四㎡の基準に基づいて、四―五人が住む家族世帯用の部屋として設計されている。面積は三つのタイプ（一八㎡、一五・八四㎡、一〇・〇八㎡）があつたが、一番広いものでも一八㎡しかなかった。

このような住宅は、一单元（一ブロック、通常三部屋ある）に三代同堂とすれば、トイレ・台所は個人専用のものになる。複数の家族が使用すれば、トイレ・台所は共用するようになっていた。このような平面は後に「万歳平面」と呼ばれ、一九八〇年代まで中国では全国的に採用されるようになった。その影響力が如何に大きなものであつたかが窺えよう。一九八〇年代には、面積上の制限がなくなり、一单元に一家族が住むようになった。

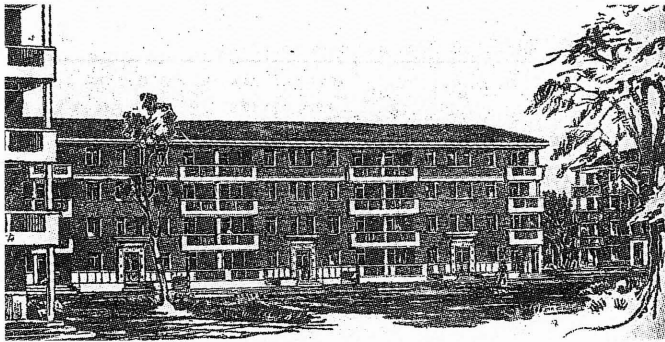


図16-1 地壇住宅区乙型実験住宅 ——立面図

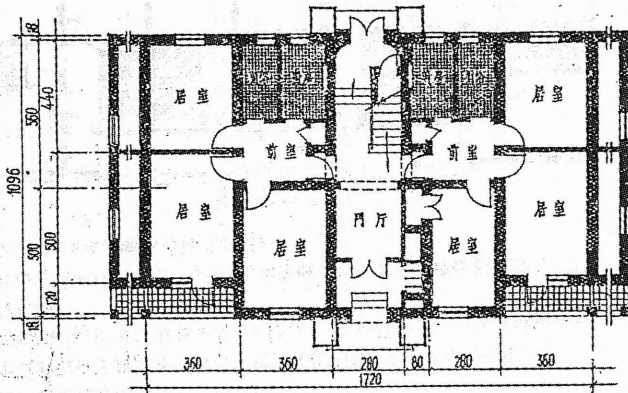


図16-2 地壇住宅区乙型実験住宅 二一单元平面图

さらに、構造面でも工夫が見られる。当時、鉄筋コンクリートは非常に高価だったため、梁のみを鉄筋コンクリートとし、床は煉瓦ヴォールト構造が採用された(図17)。煉瓦ヴォールトは鉄筋コンクリートが採用される以前は、よく使われた構造で、四川省では最初期の遺構が確認されている(四川機器工場の砲楼、一九〇五年)。ちなみに、日本では明治商工会議所(妻木頼黄、一八九九年)に鉄梁・煉瓦ヴォールトの構造が使われていた。また、梁に使われる鉄筋を節約するため、煉瓦ヴォールトの幅が1mに制限され、1m間隔で小さい梁が使われた。煉瓦ヴォールト構造を採用することにより、PCコンクリート板に比較すれば、五二〇〇mmの長さでは三〇%の節約となり、さらに、打ち放しコンクリートと比べると、三六〇〇mm幅では一九%の節約が可能となった⁴⁴。

こうした工夫は、当時の問題解決に向けた努力の結晶とも言えるが、工業化・標準化という現代建築の命題には答えていない。

プロレタリア階級のための設計思想は、留学時代の卒業設計「大陸に建つ農民会館」を連想させる。ただ、当時の中国はモダニズム批判と共に、新しい材料と新しい技術を応用するというプロレタリア建築の美学的基礎も強調できなくなり、過度にローコストを強調する道に入った。むしろ、モダニズムも永続的なものではないが、戦後復興期における、建築の大量需要に応じた有効な手段と言えよう。第一次世界大戦後のヨーロッパ、第二次世界大戦後の日本はその道を歩んだ。しかしながら、冷戦期の政治政策は中国建築を混迷の道へと誘導した。

このように見てくると、一九五〇年代の中国建築には二つの特徴が存在していたことが知られる。一つは、

漢民族の建築を中心にした社会主義の民族形式である。もう一つは、プロレタリア階級の必要に応じて生産された機能的なローコスト建築である。この二つの特徴は全く相反するものであったが、当時の中国の社会主義思想、民族政策、資本主義建築に対する態度を反映しているが、一方では、社会主義の建築思想は未だ確立されておらず、矛盾となつて現れている。しかも、併存している。趙自身も様々な建築を設計し、社会主義建築の可能性を模索していたが、それはそのまま、社会主義建築の矛盾をも露呈していた。

註

- 1 劉琨『中国建築の思潮 一九四九—一九六四』天津大学修士論文、一九八八年。
- 2 『マルクス・エンゲルス選集』大月版、補巻二、四四—頁。
- 3 ジョルジュ・コニヨ著、本田喜代治訳『民族問題 プロレタリア国際主義とブルジョワ世界主義』大月書店、一九五二年、九四—九五頁。
- 4 トム・ウルフ『バウハウスからマイホームまで』晶文社セレクション、一九八三年、二二三頁。
- 5 *Town and Revolution*, Anatole Kopp, Translated by Thomas E. Burton, George Braziller, Inc. 1970 p.212.
- 6 M.P.Tsapenko, *O Realisticheskikh Osnovakh Sovetskoi Arkhitektury*, Moscow, 1952, pp.73-74. cc. (Anatole Kopp, Translated by Thomas E. Burton, *Town and Revolution*, George Braziller, Inc. 1970 p.219)
- 7 『毛沢東集』北望社、一九七一年五月、第八卷、一一一—一八四頁。毛沢東選集刊行会『毛沢東選集』第五卷、三一書房 一九五三年、二二七—二七四頁。
- 8 上海美術專科學校、蘇州美術專科學校、国立杭州芸專、南京中央大学芸術系。
- 9 Kathleen Berton, *MOSCOW An Architectural History*, Macmillan Publishing co.Inc. New York, 1977.

- 10 『一九四九—一九五二 中華人民共和国經濟檔案資料選編 基本建設投資和建築業卷』中国社会科学院、中央档案馆編、中国城市經濟社会出版社、一九八九年九月、六〇七頁。
- 11 毛沢東「新民主主義論」毛沢東選集刊行会訳『毛沢東選集』四卷、三一書房、一九五二年、二八一頁。梁思成の話について、劉珽修士論文『一九四九—一九六四 中国建築思潮』一九八八年、一三頁を参考
- 12 一九五四年中央科学講座での講演。梁思成『梁思成文集』四、建築工業出版社、一九八六年九月、一〇四頁。
- 13 マルクス／エンゲルス『共産党宣言』MEW IV 四七九、岩波文庫、日本語訳、六五頁。
- 14 H・B・デーヴィス著、藤野涉訳『ナショナルリズムと社会主義』岩波書店、一九六九年二月、二九—三二頁。
- 15 「レーニンとマルクス主義民族理論の定式化」、同上、三〇九—三五六頁。
- 16 高島善哉『高島善哉著作集 民族と階級』こぶし書房、一九九七年七月、第五卷、一五四頁。
- 17 同上、一四〇頁、参照。
- 18 スターリン「民族問題とレーニン主義」スターリン全集刊行会訳『スターリン全集』大月書店、一九五二年八月、第七卷、三八一—三八二頁。
- 19 スターリン著、スターリン全集刊行会訳『スターリン全集』大月書店、一九五二年八月、第一一巻、一四九頁。
- 20 『建築学報』一九五四年一月、梁思成『梁思成文集』建築工業出版社、一九八六年九月、第四卷、九四—一〇三頁。
- 21 楊松（呉平）「論民族」『民族文編』一九三八年八月、七六七頁。
- 22 松本ますみ『中国民族政策の研究』多賀出版、一九九九年、二四三頁。

- 23 毛沢東「復西北各民族人民抗美援朝代表會議全体代表的電報」(一九五〇・一二・一二)、『人民日報』一九五一年一月四日)。
- 24 毛里和子「中国の少数民族民族問題」『社会主義とナショナリズム』特集『国際政治』六五、一九八〇年、六三頁。加々美光行編『現代中国のゆくえ 文化大革命の省察Ⅱ』アジア経済研究所、一九八六年三月、を参考。
- 25 一九五四年中央科学講座での講演。梁思成『梁思成文集』四、建築工業出版社 一九八六年九月、一〇四頁。
- 26 劉仁(一九〇九—一九七三) 四川省西陽県人。一九二七年に共産党に加入、長期に亘って共産党の地下活動を行った。一九三五年にソ連へ留学、一九三七年に延安に戻った。新中国が成立以後、中共北京市委員会組織部部长、城工部部长、市委員会副書記、市委員会第二書記、中共中央華北局書記処書記に歴任、北京市の建設に大量な仕事をした。『中国近现代史大典』中共党史出版社 一九九二年六月、八七一頁)
- 27 伊東忠太『伊東忠太著作集 東洋建築の研究・下』原書房、一九八三年八月、第四卷(復刻原本・昭和一二一年、龍吟社刊・伊東忠太建築文献(四))。
- 28 同註24、六四頁。
- 29 胡鈞「關於培養少数民族幹部」『十年民族工作成就』民族出版社、一九五九年、七三頁、ウランフ青島民族工作會議での發言(『人民日報』一九五七年八月二四日)。
- 30 社会主義の民族問題について、アメリカの研究者ホレス・B・デーヴィスが民族体相互間の経済的平等や母語の使用の尊重だけで解決されるものではない、各民族の主体性を尊重することを強調した(*Theory of Nationalism*, New York, Monthly Review Press, 1978)
- 31 建築工業部党組「第一回全国建築工程會議總結報告」一九五二年八月二〇日(『一九四九—一九五二 中華人民共和國經濟檔案資料選編 基本建設投資和建築業卷』中国社会科学院、中央檔案館編、中国城市經濟社会出

- 版社、一九八九年九月、三八四—三八五頁。
- 32 一九五一年二月—三日（一九四九—一九五二 中華人民共和國經濟檔案資料選編 基本建設投資和建築業卷）
中国社会科学院、中央档案馆編、中国城市經濟社会出版社、一九八九年九月、六三六—六三七頁。
- 33 「中財委關於一九五二年建築国营企業職工住宅的規定」一九五二年六月二日（一九四九—一九五二中華人民共和國經濟檔案資料選編 基本建設投資和建築業卷）中国社会科学院、中央档案馆編、中国城市經濟社会出版社、一九八九年九月、六四九頁。
- 34 劉珽修士論文『一九四九—一九六四 中国建築思潮』一九八八年、三六頁。
- 35 一九五三年三月二八日『人民日報』。
- 36 張鏞「民族伝統、地方特色、時代精神」『中日建築師北京交流会スピーチ』一九九七年四月 一—二頁。中国の公式統計により、一\$二三・六九元（一九五〇年）——三・三三三（一九五八年）、平均三・三九。
- 37 『建築學報』一九五七年二月。
- 38 『建築學報』一九五八年一月。
- 39 Clarence Arthur Perry 一八七二年ニューヨーク州に生まれ、スタンフォード大学、コーネル大学を卒業したのちコロンビア大学に学んで、社会福祉、教育問題についての研究を深めた。その後ニューヨーク州ロチェスターを中心にコミュニティ・センター運動に従事した。一九二一年、ラッセル・セージ財団によるニューヨーク大都市圏の都市プロジェクトが企画され、一九二二年から着手、その後、七年間に亘って継続され、その成果は全一〇巻調査報告書として刊行された。一九二四年一月に公式発表した。一九二八年から着手されたランドバーン計画にはベリーの近隣住区案が取り入れられた。近隣住区とは、小学校のサービスの面積で計算する、〇・八一—二km、一〇〇〇戸、五〇〇〇人、周辺交通、児童のため、商業施設も設立、緑地、建築が自

由に設置され、十分な日光がある（クラレンス・ペリー著、倉田和四生訳『近隣住区論 新しいコミュニティ計画のために』（『Neighborhood Unit』鹿島出版会 一九七九・一一・二八第一刷、一九八九・四・二〇第六刷 参考）。

40 ソ連住宅の「周辺式」（建築が道路に沿って建設される方式である）を採用するか、あるいはアメリカの「行列式」（建築は敷地に並べている）を採用するか、について議論があった。

41 『早稲田大学建築講義』一八 一九四一年三月。

42 趙冬日「北京市北郊一居住区の計画図案と住宅設計」『建築学報』一九五七年二月、三八―四八頁。

43 一九二九年にペリーは『近隣住区論』（THE NEIGHBORHOOD UNIT IN REGIONAL SURVEY OF NEW YORK AND ITS ENVIRONS）を発表、近隣住区論の原則は、

1. 規模——近隣住区の開発は、通常、小学校が一校必要な人口に対して住宅を供給するものであり、その実際の規模は人口密度に依存する。

2. 境界——住区は通過交通の迂回を促すのに十分な幅員をもつ幹線道路で周囲をすべて取り囲まなければならない。

3. オープン・スペース——特定の近隣生活の要求を充たすために計画された小公園とレクリエーション・スペースの体系がなければならない。

4. 公共施設用地——住宅の範囲に応じたサービスマネジメント領域をもつ学校その他の公共施設用地は、住区の中央部分が公共広場のまわりに、適切に纏められていなければならない。

5. 地域の店舗——サービスマネジメントする人口に応じた商店地区を、一カ所またはそれ以上つくり、住区の周辺、できれば、交通の接点か隣りの近隣住区の同じような場所の近くに配置すべきである。

6. 地区内街路体系——住区には特別の街路体系が作られなければならない。まず、循環交通を促進し、通過交通を防ぐように、全体として設計された街路網が作られる。

44 同註42、46—47頁。

三 人民大会堂——巨大な社会主義モニュメント

社会主義建築の模索の中、一九五九年には建国一〇周年を迎えた。一〇大建築を作る計画があつた。その内、最も重要な建築は人民大会堂である。

平成九年四月二九日、中国の人民大会堂で早稲田大学稲門建築会会長の桜井清の署名した表彰状が早稲田大学の第二九回卒業生、人民大会堂の設計者趙冬日に贈られた。表彰状には次のように記されている。

「趙冬日 先生

あなたは昭和一六年三月に早稲田大学建築学科を卒業された後母国中国に戻られ、国家の象徴ともいふべき天安門広場、人民大会堂等の設計に携り、多大の貢献をされました。

このことは私達稲門建築会一同の大きな誇りであり、喜びとするとところであります。よってここに感謝と尊敬を込めて記念品を贈り、表彰するものであります」。

人民大会堂（日本の国会議事堂のような存在）が北京の天安門広場の西にあり（図18）、明清故宫と共に

大きな存在である。一九八九年の人民大会堂が天安門事件の全容を俯瞰した。また、人民大会堂は解放後一〇年における中国建築思想発展の総決算でもあり、当時の中国政治を反映している場でもある。その特徴として、一つは建築の民族性探索の延長——折衷主義作品である。もう一つは、巨大なモニュメントである。以下この二つの面を巡って検討したい。

1 民族性探索から折衷主義へ

(1) 人民大会堂コンペ

一九五八年、人民大会堂の図案が公募に付された。戦後暫くは、公募によるコンペティション（競技設計）はまだ少なく、この動きは当時の中国における「百花斉放、百家争鳴」と関係している。

一九五六年五月一六日、科学院文連合同会議において、党宣伝部長の陸定一から「百花斉放、百家争鳴」が提出された。これにより、束の間の出来事ではあったが、言論の自由が到来した。中国建築学会でも、これに呼応するかのように、『建築学報』誌上において、澎湃として議論が巻き起こった。

焦眉の問題は現代建築に関するものである。一九五六年の六月号では、清華大学建築学部学生蔣維泓・金志強の両名が「我々は現代建築を欲する」と題し、問題提起を行った。そこでは、「我々は現代美が欲しい……科学技術は古い様式を守る道具ではない。」とし、戦後初めて現代建築（モダニズム）

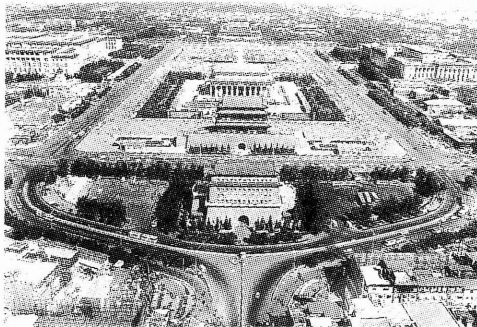


図18 天安門広場

の必要性が提起された。

人民大会堂のコンペに参加したのは、全国一六省市の二四組織で、三〇人余りの設計専門家が北京に招かれ、九月一五日に第一回目の図案が完成している。その後、一〇月までに八回にわたる修正を経て、最終的に八四件の平面図と一八九件の立面図が提出された。マスタープランについては、基本的に都市計画で決められていたので大きな差は見られなかった。

建国後一〇年の間の計画に基づいて、幾つかのマスタープランが計画された²。

①人民英雄記念碑を軸にして、西は人民大会堂、東は革命歴史博物館を置く。

②東南に中国革命博物館、東北に国家オペラ、西南に歴史博物館、西北に人民大会堂。四つの建築で広場を囲む。

③記念碑の南に、東に中国革命博物館、西に歴史博物館、記念碑の北、東に国家オペラ、西に人民大会堂
④第二案の基礎の上に、前門（筆者注…正陽門、箭楼）を取り壊し、人民大会堂を作る。

⑤記念碑の南に、東は国家オペラ、西は青少年宮。記念碑の北には、革命歴史博物館、人民大会堂の南は記念碑と同じ線に立つ。

⑥記念碑の南を緑化する。東は革命歴史博物館、西は人民大会堂。
また、人民大会堂の平面計画にも幾つかの種類が見られる³。

①人民大会堂と宴会ホールの二つの部分で構成され、方向は東西で大会堂は東に向き、宴会ホールは西に向き、二階に置く案もある。

②人民大会堂と宴会ホールの二つの部分で構成され、方向は南北の方が長い、南に大会堂、北に宴会ホー

ル、東は共用入り口。

③人民大会堂と宴会ホールの二つの部分で構成され、両者は廊で連絡、大会堂がメインで、東はメイン入り口。

④大会堂、宴会ホール、人民代表大会常務委員会の三つの部分で構築され、宴会ホールは長安街に向き、大会堂を中心にして、人民代表大会常務委員会を南に置く。

立面については、多くの表現が見られた。民族形式の浪費問題が批判されたので、「大屋根」が非常に少なくなった（北京市計画管理局張鏞の案）。ソ連建築の影響が見られたのは、清華大学建築学科の図案である。またモダニズム案が多く提出された。中南工業建築設計院、華東工業建築設計院、北京工業設計院の林榮義など、同済大学建築学科、北京市計画管理局設計院鄭光復などの設計はそのものである。とくに、鄭光復の図案（図19）はカーテンウォールが大胆に採用され、非常に前衛的な作品であった。その他、中国や西洋の伝統様式を簡略化した「簡体版」とでも称されるような提案も見られた。

「百花斉放、百家争鳴」は建築界には大きな反響があった。とりわけ、モダニズムの強調は著しいものとなった。工業設計院から提出されたコンペ案にモダニズムが多いのは、工業建築が既に機能優先にあることを示している。

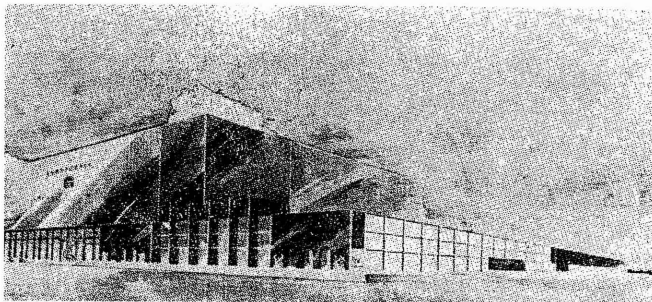


図19 人民大会堂のモダニズム図案、鄭光復等設計

工業建築は戦後建築家、いわゆる芸術家たちには無視された面もある。つまり、「美観」として認識されていないのである。しかしながら、工業建築がより社会主義の経済発展に相応しい形式で進展していることは事実であった。

「百花斉放、百家争鳴」は反右派運動によって打ち砕かれ、多くの知識人が革命の対象右派となった。このことは建築界にも少なからぬ影響を与えた。むろん、モダニズムは依然、中国では生存場所がなかった。結果、後述するように、折衷様式が選択されるのである。

(2) 趙冬日の設計

趙冬日は当時、北京市都市計画局に勤めていた。一九五八年八月にソ連を訪問、九月に北京に戻り、一〇大建築の配置計画に着手した。時を同じくして、黒川紀章はソ連の国際建築協会大会に参加し、ソ連の構成主義建築を探しにいった。しかし、構成主義の代わりに、ソ連の工場で住宅タイプを造って、現場で組み立てる方法に惹かれ、中銀の創造源流となった⁴。

趙冬日は途中から人民大会堂のコンペに参加した。

彼の設計思想は三つの方面にわたって考慮されている。すなわち、①政治の必要、②平面配置の必要、③建築造形と民族スタイル、である。具体的にその内容を見ると、趙の思想は以下のような⁵。

①政治の必要について

北京市委員会書記、市長の彭真（一九〇二—）は当時「我々は物質を生産する工場の建設のみを知って

るが、政治工場の建設は知らない。万人ホールこそは一つの政治工場である。考えてみたら、我々は会議を開いて、議論して、一回で一人の意見を聞ければ、一回で党の方針政策を一人に訴え、下まで届ければ、如何に大きい物質を生産できるか。これは何千万元で比べられないことである」と設計者に指示した。建築家・趙冬日は人民大会堂について、「外国の国会議事堂と同じく国家の政治活動の中心ではあるが、我国の社会制度に基づき、国家の政治センター」として理解している。

② 平面配置について

「国家級の重要建築なので、機能を満足させなければならぬ。同時に現代的、新しい中国のことを表現する。しかも、中国の伝統建築の特徴を発揮する。中国の伝統的な建築配置は『深宅大院』、『步移景異』などの手法を用い、一歩ずつピークを迎える。平面で民族形式を使い、社会主義国家の偉大さを表現する」。

③ 建築造形について

天安門、天安門広場にあるその他の建築との関係は「協調」しかも「新中国の代表建築」である。また「古今中外に分けずに、すべて吸収する、すべての長所を利用する」、「民族性、地方性、時代性をもつ建築を創造する」。

趙の思想に政治的要求を満たすことを前提にして、設計案が提案された。政治的意図を表現する有効な手段の一つは規模の問題である。これは後に説明する。もう一つは様式である。彼の思索の中では、特に民族性の問題が意識されていることが、平面計画や造形面についての考えから窺える。それは一九五四年以来、彼の作品に現れた精神である。

彼は民族様式を如何に考えていたのだろうか。彼はこのように述べている。

「人民大会堂のような重大政治意味を持つ大型建築はどのようなスタイルを使用するか？ 資本主義の近代建築形式を追いかけるか？ 中国古建築を改良した「民族形式」を採用するか？ また中国建築の社会主義的新しい形式を創造するか？ 当たり前のことで資本主義である近代的な建築様式を使えない。改良形式は実際に前向きではなく後ろに向いている。創造性が欠ける。しかも共産主義思想が欠ける。」

人民大会堂は我が国の最高権力機構の所在地である。様式についてできるだけ社会主義、共産主義の美しい未来図が示せる、六億人民の偉大なる気概が映せることに努力する」。

ここで彼は、改良した「民族形式」（大屋根と考えている）を排除した。さらに「モダニズム」をも排除した。この二つの形式は当時批判されたものである。「社会主義、共産主義の美しい前景が示せる、六億人民の偉大気概が映せる」様式は先例がないため、抽象的な存在でしかなかった。

一九五八年、趙はソ連へと見学に赴いた。また、留学時代日本の国会議事堂の見学経験もある。そして中国の伝統建築の見本とも言える故宫は目の前にある。彼は人民大会堂を設計したとき、ソ連の円柱ホール、中国の故宮、日本の国会議事堂を参考にしたと語った。

ソ連の西洋古典様式、中国の古典様式、日本の折衷主義を参考にしてできた人民大会堂の図案は折衷的な様式である（図20）。大屋根を架ける替わりに、瑠璃で陸屋根の一周を張り付ける。陸屋根は重さが足りないので、柱を頭貫の下に置く。また色は明るい黄色、緑、オレンジ、暗い所で深い緑が使われた。中国の伝統的な赤を使わず、壁は黄色、柱は銀色大理石、基壇は赤味を帯びた御影石を使う。列柱の間隔は非常に緊

密で、石造建築の特徴を呈している。

まず、伝統的な大屋根を削ったことは中国的イメージを弱めることになった。さらに、列柱を使って、しかも中国の間隔、色、材料を使わないことは西洋式の印象が一層強くなる。

この案に対しては、直ぐさま反対の声が上がった。北京で梁思成は芸術の面と比率について意見を提出した。彼は中国にとって適切な芸術の順番は、一、中と新、二、西と新、三、中と古、四、西と古、と思っっている。彼はこの図案はルネサンスをまね、「西と古」である。また、イタリヤのサン・ピエトロ大聖堂はルネサンスのピーク、学院派の典型である。しかし、人民大会堂は偉大、荘嚴、隆重を追求するために簡単拡大した。幅、高さを簡単に一倍拡大、窓、門、壁も同じく拡大、人は中に入ると小さくなる、巨人国に入るような感じである。歴史のミスを繰り返すと評価している。¹¹

それに対し、趙は、東北で瀋陽の故宮で、「托枋」を良く使い、人民大会堂は中国式であり、西洋の「托楣」¹²と違う、と弁説した。¹³それは彼の心の中に存在している強い民族意識の表れでもあった。「西と古」という批判は偏っているところが確かに否認できない。人民大会堂の装飾に中国の瑠璃以外には、内装に八角天井を採用し、故宮の太和殿天井の影響が見られている。むしろ、「中西折衷」と称するほうが正確かも知れない。しかし、彼の弁説から見ると、初期に設計者自身が「折衷主義」と「社会主義」との融合の正当



図20 人民大会堂

性を認識しなかった。この問題は後に中央のリーダーの解説により、認識が統一された。

(3) 「中西折衷」とプロレタリアのインターナショナルリズム

「中西折衷」と「社会主義」との融合の正当性が確認されたのは、周恩来と彭真の解説である。「西と古」の批判の声に対して、総理は「我が中国人民がなぜ偉大かというのは、我々は役に立つものをすべて吸収する。古代・現代、中国・外国を問わずに全て利用する。現在の問題は古と西の是非問題ではなく、一万人の会議、五〇〇〇人の宴会問題である。八ヶ月で完成しなければならぬ。すぐ決め、すぐ工事を始めなければならぬ¹⁴。」一方、彭真は「古今中外すべての優れたものを利用できる。適用、経済、美観の原則を守ることさえできれば、よいのである。中国各民族は一つの特徴がある。即ち外国のものを学ぶ、しかも自分のものになる。これこそ外国を越えられる¹⁵」。

また早くも、毛沢東は「新民主主義論」で新民主主義文化は民族的・科学的・大衆的な文化と論じ、さらに、民族的文化については、「中国は外国の進歩的な文化を大いに吸収し、それを自分の文化の糧としなければならぬ。……たとえば、資本主義諸国の啓蒙時代における文化のように、およそわれわれに今日役に立つものは、すべて吸収しなければならない¹⁶」とした。

こうして、毛沢東はマルクス主義の中国への導入を実践し、文化の面にも応用した。それは折衷主義建築の設計における理論的基礎となっている。

折衷主義と言えば、中西折衷、多民族折衷、東洋折衷など数多く存在している。古典折衷主義建築は秩序・安定・威勢・永続性を、誇示することのできる建築である。インターナショナル・スタイルはこのレベ

ルにおいて意思の疎通を欠いたため、公共建築の分野において、結局失脚してしまった。政権は現代的かつ恒久的で、記念碑となり得るものを求めていた。¹⁷

当時の中国では民族性を強調していたため、「多民族性」の折衷はより重要課題のはずであったが、前述したように、民族の主体性は社会主義民族政策の中心的存在ではなかったため、多民族性の探索には重要な障碍となっていた。さらに、大漢族主義を批判した後、地方民族主義の批判も加わり、多民族形式の検討はできないと言える。

中西折衷はインターナショナルな傾向と言える。それはプロレタリア階級におけるインターナショナルの特徴と一致している。スターリンが目指している民族形式は「全人類的文化」¹⁸である。如何に理解するかについて、中国の共産党リーダーと建築家が中西折衷の様式で新しい解釈を与えた。「中西折衷」も一民族の様式ではなく、全人類の各民族の様式を総括に取り入れたことを表現できるであろう。それは、従来の折衷主義と異なるところではないかと考えている。

明治以後、日本の建築様式に関する議論は五〇年の歳月を重ね、結果、国会議事堂のような折衷様式が誕生した。社会主義とは関係ないが、明治末以後の欧化主義と国家主義との格闘を経て誕生したものである。また、伊東忠太の東洋折衷も大アジア主義の背景を有している。

社会主義初期における古典折衷主義の致命的弱点は、当時のプロレタリア階級の経済条件と合わない点にある。ソ連の民族形式は一九五三年のスターリン死後に終止符を打った。規格化の技術開発、経済的な面を考える設計段階に入った。中国はソ連との関係が悪化した後、スターリン時代の影響が続いていた。¹⁹折衷主義は反修正主義を表現するための存在でもある。

2 超尺度のモニュメント

人民大会堂の設計条件は一万人収容の会議ホールである。その後、五千人の宴会ホール、人民代表大會常務委員会のオフィスを加え、延べ床面積は一七万一八〇〇m²となった。日本の国会議事堂(五万二二六五m²)²⁰に換算すれば、実に三倍強の巨大さを誇る。

ではなぜ、こうした巨大建築を建造することになったのだろうか。どのような政治的意図が表現されているのか、について検討を試みたい。

(1) 大衆動員の場——天安門広場

天安門広場は「百年來旧皇宮の前院を人民民主の広場に替える」と認識され、改造すべき対象となった。²¹ 明清時代の天安門前の空間は皇居と一体化している。前門は北京内城の城門である。前門に入ると、さらに中華門、千步廊、長安右門・左門が続ぎ、紫禁城に入る序曲となっている。千步廊は民国時期に取り壊されたが、両側の赤い壁はまだ残っている。改造前は「T」字形で、東と西で各三座門がある。清代には長安右門、長安左門と称し、民国時代には東長門、西長門と称した。「T」型広場の面積は一一haである。横の部分だけで六haあり、モスクワの赤の広場よりも広い。縦の部分は赤い壁に囲まれ、その幅は一〇〇m程もあり、すでに十分に広いが、新中国の要求に合うものではなかった。

天安門改造の発想は一九四九年の国慶大典にまで遡るであろう。

建国以後、国慶節(一〇月一日)と「五一」労働節に盛大なパレードが挙行された。五〇万人のパレードは正歩で天安門を通過し、城楼の上の毛主席、中央リーダーたちに挨拶する。それは毎年の伝統になった。

パレードの指揮部の要求により、赤線（敷地境界線）の間隔は一二〇m、道路（長安街）の幅員は五〇mであるが、天安門広場前の一km（南池子から南長街まで）の区間については、演出上（パレードの隊列を増やすため）、幅員を五〇mから八〇mに拡張することになった。

一回のパレードには六〇万人が参加する。広場には一〇万人が配列され、五〇万人が隊列を組んで長安街を九〇分以内に通過すると、広場に配列されている一〇万人が主席台へと駆け込み、場面がピークに達する。²²しかしながら、天安門広場の狭隘感是否めなかった。社会主義は強い革命精神を帯し、また封建主義には反対する。こうした基準で判断すれば、「百年来の旧皇宮の前院を人民民主の広場に替える」ことは必然的なことでもあった。

しかし一方、今日の価値基準で言えば、文化遺産と目される文化財建造物の破壊は避けられなかった。一九五五年には広場の拡張工事が始まり、東西の赤壁は取り壊され、また一九五七年には「長安左門」、「長安右門」も取り壊された。拡張後の広場は四四haとなり、幅は五〇〇m、長さは八八〇mに至った。²³この巨大化の決定は中央政府の指示によった。²⁴

(2) 人民大会堂の巨大さ

天安門広場のスケールは人民大会堂のスケールに深く関与している。まず、人民大会堂が一人の会議場として設定された。現在でも、二〇〇〇席の会議場と言えば大規模なものとなるが、四四haの広場と一人という規模はまさに空前のスケールであった。また、一〇大建築の総計は五〇万㎡と計画された。一〇大建築を単純に平均すれば、人民大会堂は五万㎡（国会議事堂と同じ面積）となるはずであるが、一人収容の

会議場が要求されたため、一席当たり7㎡で計算すれば、七万㎡となる。一九五二年に建設された首都劇場の一席一三㎡と比べると、半分ほどに削られてはいたが、経済的な面を考慮したためである。

当初、会議場のみが計画されたが、二回目の修正時には、周総理の要求により、五〇〇〇人の大宴会庁と若干の中型宴会ホールが加えられた。一席当たり一・四㎡で計算すれば、大宴会ホールは七〇〇〇㎡以上が必要となる。さらに、三回目の修正時には、人民代表大会常務委員会委員の要求を受け、人民代表大会常設委員会の事務所も追加された。

ここまで、三つの収容施設の要求があったが、面積変更の指示がなかったため、建築家たちは大会堂の面積を減らす工夫に取り組んだ。結局、宴会ホールは地下と地上で二万三五〇〇㎡、人民代表大会常務委員会は一万九五〇〇㎡、トータル七万五〇〇㎡となり、どうしても五〇〇〇㎡多くなってしまった。

しかしこれでは、「機能的には満足できても氣勢に欠ける」と北京市委員会副書記・劉仁は考えていた。面積上の制約から、北側、つまり長安街側の幅は一〇八mとなっていた。しかし、劉仁は修正後の第三回の図案を見て、一〇八mではあまりに狭く、長安街の一八〇m幅と合わないと考え、面積は大胆にも一〇万㎡に変更されたのである。

劉仁の指示に基づいて、立面を修正し、長安街側の幅は一七四mにまで拡大された。これにより、六億人民の広大な心と新中国の偉大な姿勢を表現しようとする目論んだ。また正面について、彭真は、大門は中国独自の様式を採用するべきであるとし、柱廊中部の幅を拡大し、装飾を凝らし、氣勢偉大、開放壮麗を追求するように、と指示を出した。中部の幅はすでに拡大されていたが、彭真はさらに拡大することを求めた。²⁵

まさに、中央政府や北京市のリーダーたちは人民大会堂の建設に際し、様々な指示を寄せたのであった。

そしてここには、人民大会堂の巨大さの根拠が、単純な機能的要求に基づくものではなく、人民、つまりプロレタリアのアイデンティティと国際社会に対して、新中国を強烈にアピールする意識を読み取ることができる。

中央の指示を踏まえ、さらに最終的な調整を経て、人民大会堂は敷地面積一五ha、延べ床面積一七万一八〇〇㎡、南北長三三六m、東西幅一七四m、容積一六〇万㎡の巨大空間になった。

しかし、これに対して反対意見も出された。建築工業部北京工業設計院の総建築師・王華彬は「面積は広すぎ、天井は高すぎ、柱は多すぎ、窓は少なすぎ、したがって、音声と通風が良くない。面積が七万㎡から一七万㎡まで増えたのは浪費ではないか。柱は二六mでは細く見える。ホールは三〇mと高く、人間はその中に座ると天の下にいるようで小さく見える。エントランスから内部へ光が届かない。柱は一八〇本にのぼるが、そんなに必要ではない。立面は平面機能から考えるではなく、形式は内容を表現できない」とその巨大さを痛烈に批判した。²⁶

また、上海の六名の専門家も苦言を呈した。天安門広場の幅が五〇〇mでは大き過ぎる。欧州では、高さとの幅の比率は、一対四—一対六が一般的で、仮に幅を五〇〇mとすれば、高さは一二五m—八三m必要となる。人民大会堂の高さは四〇mなので、四〇対五〇〇＝一対一二・五となり、調和がとれていないと指摘した。

しかし、政治家たちの意見は違っていた。彭真は「ある人は、天井が高すぎて、人が小さくなると言った。天は高くないだろうか。我々は天安門広場に立って、なぜ自分が小さくないと思うか²⁷」と反論し、周総理は「我々は天の下に立つと天が高くないと感じられる。海のそばに立つと、海が遠くないと感じられる²⁸」

と意見を述べた。

最終的には、周總理が専門家を招集して会議を開き、意見を総括することになった。²⁹

①大会堂においては安全が第一、新しい構造実験を止める。

②我々は社会主義の「大」を好み、また社会主義の「功」を好む。目的なく追求するのではなく、適用、経済、美観の原則を守りながら、「大」も適切なものとする。

③人を主とし（精神と物質を含む）、物は人に使わせるため、その細部を設計する。サン・ピエトロ大聖堂は神社会のもの、人々は教会に入ると、天主の偉大さにより、自分が小さいものと感じられる。我々は違う。人民は国家の主人であり、自分が主人であると考えなければならぬ。ものの奴隷になつてはいけない。

④古今の名建築はすべて労働者の手によりできた。我々プロレタリアートは国際主義者であり、如何なる様式も包括して利用できるはずである。偏狭な地方民族主義に囚われてはならない。もし、未だ満足できない場合、他のプロジェクトで試して欲しい。

周總理はまず、大建築の構造問題に強い関心を抱いていた。彼は一人一人の専門家に尋ね、建築の安全性を確かめ、「人民大会堂には二つの重要な側面がある。一つは崩壊しないこと。もう一つは美しいこと。崩壊しないことが何にもまして重要である。人民大会堂の寿命は少なくとも故宮・中山堂よりも長く、三五〇年は確保する必要がある。」と述べた。³⁰人民大会堂の構造技術の解決は、解放後の一〇年にわたる工業建築の発展と実践と無関係ではない。とりわけ、「大躍進」の影響により、一九五八年前半に設計された工業建築の面積は第一回五ヶ年計画中に設計された工業建築の合計よりも多い。³¹それは人民大会堂の建設に貴重な

経験を与えた。

つまり、巨大建築の構造問題を除けば、イデオロギー的には、周総理は「我々は社会主義の『大』を好み、社会主義の『功』を好む」と巨大建築建設に賛意を示していた。

周総理の話はこのコンペにピリオドを打ち、この巨大建築は周総理の評価によって公式見解となった。

(3) 巨大建築と被压迫民族

巨大建築は中国の発明ではなかった。一九三四年のソビエト宮コンペの当選図案 (Boris Iofan, Vladimir Shchuko, Vladimir Gelfeikh) は巨大建築である。この建築のメインホールは二万一〇〇〇席、会議ホールは六〇〇〇席に及ぶ。高さは三一五m、その上に一〇〇mのレーニン像が置かれている。この建築は「スターリン主義者高層ビル」と称えられた。³² この建築は戦争のため建設できなかったが、同様のイデオロギーを持つ巨大建築は幾つか建設された。例えば、ソビエト・ハウス、モスクワ大学などがその例である。ソビエト・ハウスは長さ二二〇m、奥行きは一五〇mある (図21)。また、モスクワ大学も非常に巨大で、一九五六年に見学した日本学術会議の視察団を驚かせた。³³



図21 ソビエト・ハウス、1936—1941年、Noi Trotskii設計

同時代のドイツの帝国首都の建設も進んでいる。ヒトラーは収容力四〇万人と定めた「大スタジアム」ニュルンベルク・スタジアムを計画した。この建築は長さ五五〇m、幅四六〇m、空間は八五〇万³⁴m³、つまりセーオプス・ピラミッドの三倍強になる。(図22)

ヒトラーは建設労働者の前で、次のように力説した。

「なぜ、常に最大であらねばならないのか？ それは、一人一人のドイツ人に自尊心を取り戻してやるためである。すべての領域にわたって、一人一人にこういうためである。我々は劣ってはいない。それどころか、他のどの国民にも絶対に負けないのだ³⁵」と。

またソビエト宮も「Eifel塔及び帝国主義国家建築より高い」ものにした³⁶。

ここで巨大さの問題は民族性とも密接に関係している。ナチスのナシヨナリズムの重要な特徴はその排他性にある。巨大建築は民族の優秀さと強大さを強調している。また、レーニンとスターリンとも民族的に抑圧に反対する被圧迫民族の闘争、帝国主義に反対する植民地民族の闘争という

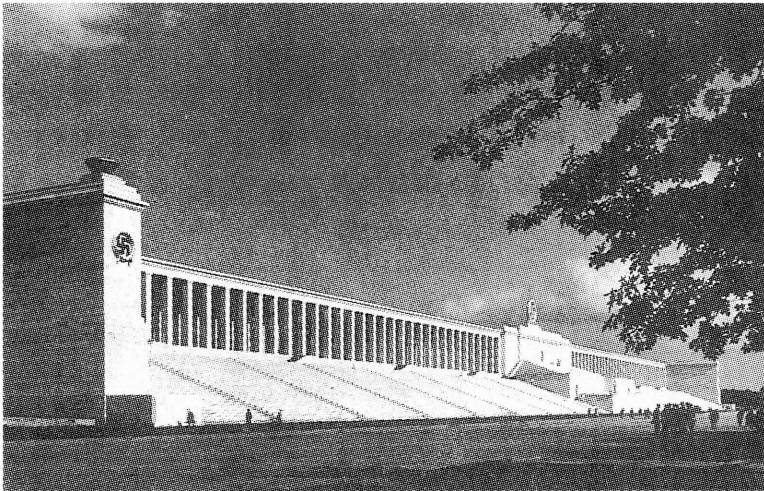


図22 ニュルンベルク・スタジアム、1936年、Albert Speer設計

民族解放運動を強調した。³⁷それは巨大建築の民族理論の基礎となっている。つまり、インターナショナルの植民地被圧迫民族と帝国主義の圧迫民族との対決は巨大建築の対決という形で表現されている。

巨大建築が強調した被圧迫の民族性は、根本的に折衷主義に表現されたインターナショナルと一致している。ある民族の様式で表現するよりも、全人類の被圧迫民族という広義的民族主義を表現している。それは社会主義のナショナルリズムの一番大きな特徴であろう。

一九五〇年代に入ると、国際的な状況が変わったが、社会主義と資本主義の両陣営の冷戦がはじまり、さらに競争が激しくなった。ソ連では、一九四六―五〇年における平均成長率は二〇・五%、一九二八年に比較して一九五〇年の成長率六倍強である。戦後アメリカ、イギリスは五―七、ソ連は二二%、一九二八年の第一回五ヶ年計画の統計から見ると、ソ連の工業生産は二二年間一三倍、アメリカは二倍、イギリスは一・六倍である。一九四六年鋼鉄の目標は六〇〇〇万トンである。³⁸

一九五七年（一月四―一六日）、モスクワで社会主義国共産党と工人党代表会議が開かれ、ソ連は社会主義国は主要資本主義国を越えたと提唱し、ソ連はアメリカを、中国は英国を越えたと考えていた。中国は一九五七年鋼鉄五二〇万トン、五年後一〇〇〇―一五〇〇万トン、さらに五年後に三五〇〇―四〇〇〇万トン、一五年には英国を越えたと提言。一九五七年と一九五二年を比較すると、工農業総産値が六二%、工業は一三二%の成長を遂げた。

主要資本主義国を越えるのは大躍進の前提となった。大躍進の目標として、農業成長率六・〇%から一六・二%、工業一〇%から三三%に伸ばした。

人民大会堂は、社会主義と資本主義との闘争を背景とした産物と言える。上述した六億の人民の広い心と

新中国の偉大さを表現したいという政治的意図には、まさにプロレタリアのアイデンティティと、国際社会に直面し、新中国をアピールするという二つの意味が含まれている。新中国の人民は被压迫民族として資本主義と対抗する意識が人民大会堂を通して表現されている。

また、当時のソ連との関係も悪化の兆しを見せていたが、一九五九年の国慶一〇周年記念のため、フルシチョフを招聘し天安門で検閲させた。人民大会堂はフルシチョフに中国人民の力を見せる役割をも担っていたのである。無論、人民大会堂が一〇ヶ月で竣工したのは帝国主義に対しての勝利だけではなく、ソ連修正主義への挑戦でもあった。

周総理は「偉大な一〇年」で人民大会堂に総合的な評価を与えた。「人民大会堂のような巨大な建築を一〇ヶ月余の短期間のうちに竣工できた。その精密・美しさにおいて、我が国の同類建築を遙かに越えるものとなった。また、世界的にも一流の建築と言える」³⁹。たしかに、この社会主義と資本主義との闘争を背景にした政治性は、一般建築には表現できないであろう。

全体主義研究の先駆者ドイツのカール・J・フリードリッヒはソ連とドイツの全体主義の特徴を六点に纏めた。その内、公認のイデオロギー、通常は一人の人間に指導される大衆政党、全経済にたいする中央からの統制と指導など特徴が列挙されている。⁴⁰一九四九年以後の中国も全体主義として指摘されたこともあるが、⁴¹もし仮に、一九五〇年代の中国で全体主義の特徴が成立するとすれば、全体主義の要因が国家を象徴する巨大なモニュメント建築を造ることに可能性を提供したと言えるであろう。逆に、巨大建築は公認のイデオロギー、一人の人間に指導される大衆政党を支える重要な柱でもある。

人民大会堂の建設に至る過程には、社会主義の表現を巡る様々な議論が展開されたが、むしろ、これによって終止符が打たれた訳ではない。その陰では、幾多の犠牲も払われた。天安門前の長安左門・長安右門などが封建主義の象徴として取り壊されたが、これは今日、文化遺産の保存に直結する問題である。

また、解放後の一〇年は、一般市民の住宅問題に代表されるように、社会主義における民族問題と経済問題が拮抗し、未解決のまま残された課題は多い。まさに、中国にとっては、社会主義思想が国民国家に浸透していく一〇年であったと言える。そして、建築様式は模索の一〇年を歩んだのである。

註

1 一〇個の記念的な重要建築。即ち、人民大会堂、北京民族飯店、北京工人体育场、中国革命と中国歴史博物館、北京駅、華僑飯店、中国人民革命軍事博物館、全国農業展覽館、民族文化宮、中国美術館。

2 趙冬日「人民大会堂の設計図案の鑑定から新建築スタイルを語る」（「人民大会堂の設計方案評選來談新建築風格的成長」『建築學報』一九六〇年二月）。

3 同前。

4 中銀（中銀カプセルタワービル、一九七二）は、黒川紀章の代表作。中央のシャフトはリフトと階段をもつ垂直の交通路であり、固定された構造である。外側にユニット化された設備パイプが設置され、量産された部屋カプセルが固定される。このプロジェクトは、個の空間の自由な組合せによるメタボリックな表現の可能性を追求することと、その技術的裏付けをすることであった。ソ連の影響についてNHK番組の放送による。

5 趙冬日「人民大会堂の設計過程を回憶する」『北京文史資料』一九九四年二月、第四九号、一三一—一六頁。

- 6 同註5、二六頁。
- 7 同註5、一六頁。
- 8 同註5、二七頁。
- 9 趙冬日「思緒・感觸、希望——自述」『建築設計大師趙冬日作品選』北京市建築設計研究院、科學出版社、一九九八年、一六〇頁。
- 10 かしらぬき、宋で蘭額、清で額枋。
- 11 張鏞『我的建築創造道路』中國建築工業出版社、一九九四年二月、一五三頁。
- 12 西洋建築の柱の上に置くアーキトレーヴを指す。
- 13 同註11、一五四頁。
- 14 同註5、二七頁。
- 15 同前。
- 16 毛沢東「新民主主義論」毛沢東選集刊行会訳『毛沢東選集』四卷、三二書房、一九五二年、二八一頁。
- 17 スピロ・コストフ著、鈴木博之監訳『建築全史——背景と意味』星雲社、一九九一年、一二七二—一二七三頁。
- 18 スターリン著、スターリン全集刊行会訳『スターリン全集』大月書店、一九五二年八月、第一一卷、一四九頁。
- 19 中ソ関係悪化は一九五六年からである。一九五六年二月四日ソ連共産党二〇回代表大会でフルシチョフは「個人崇拜及びその結果」の秘密スピーチをした。中国代表団も参加し、個人崇拜の反対について賛成したが、全面的にスターリンを否認することには賛成しなかった。一九五六年一〇月、ソ連はポーランドに出兵、中国

は反対した。一九五七年毛沢東はソ連一〇月革命記念に参加、そこで中ソの間に原則的な議論が行われた。資本主義から社会主義に進化の問題について意見が違う。中ソ分岐が深まる。一九五八年七月三十一日、フルシチョフは中国訪問。その前にソ連国防部長は中国へ、ソ中連合艦隊について検討した。中国は、ロシア民族主義を中国海岸に拡大したい、中国をコントロールしたいのではないかと認識し、拒否した。フルシチョフはそれを釈明するために中国へ、ソ連は共同艦隊を研究するだけと釈明した。毛沢東は反対した。

20 『帝国議事堂建築の概要』大蔵省官繕管財局、昭和十一年一月。

21 同註5、一七頁。

22 同註11、一四六頁。

23 趙冬日「天安門広場改造計画及び人民大会堂方案設計」中日建築師北京交流会、一九九七年四月、一頁。

24 同註5、一七頁。

25 同註5、一九頁。

26 同註5、二八頁。

27 同註5、二七頁。

28 同註5、二七頁。

29 同註11、一五六頁。

30 同註5、二八頁。

31 「二、工業建築」『建築設計十年 一九四九—一九五九』中華人民共和國建築工程、中国建筑学会、一九五九年一月。

32 *Stalinist skyscrapers. William Craft Brumfield, A History of Russian architecture, Cambridge University*

Press, 1993.

- 33 日本学術会議編『ソ連・中国学術視察報告』日本学術振興会刊、一九五六年、一二九頁。
- 34 アルバート・シユベール著、品田豊治訳『ナチス狂気の内幕』読売新聞社、一九七〇年一月、八〇頁。
- 35 同前、八一頁。
- 36 Anatole Kopp, Translated by Thomas E. Burton, *Town and Revolution*, George Braziller, Inc. 1970, p.222
- 37 スターリン「民族問題とレーニン主義」スターリン全集刊行会訳『スターリン全集』第7巻、大月書店、一九五二年八月、三六七頁。
- 38 同註33、一三二—一三三頁。
- 39 同註5、三〇頁。
- 40 Carl J. Friedrich and Zbigniew K. Brzezinski, *Totalitarian Dictatorship and Autocracy* の著作の初版は一九五六年に刊行された。カール・J・フリードリッヒによれば、全体主義の特徴は、①公認のイデオロギー、②通常は一人の人間に指導される大衆政党、③一切の武力闘争の武器を現実に行使用することが、党とそれに従属する官僚機構にほとんど完全に独占的に統制されていることである、④効果的なマス・コミュニケーションの一切の手段に対して第三の場合と同じように行使されているほとんど完全な独占である、⑤物理的ないし心理的なテロ的警察統制の体系である、⑥全経済にたいする中央からの統制と指導、としている。なお、一九六五年の改訂版において、⑥が加えられた。
- 41 レオナード・シャピーロ著、河合秀和訳『全体主義』福村出版、一九七七年、一四頁。

四 まとめ

1 社会主義の建築とは何か

社会主義の建築とは一体何であろうか。むろん、この問題についての解釈は一樣ではない。建築は社会主義の思想と共に変容し、各段階により趣を異にしている。中国の建国初期に焦点を当てれば、社会主義建築はスターリン時代のソ連の影響が濃厚であった。結果、民族主義の問題が社会主義建築の重要な思想的根拠となったのである。また、建国初期に狭義の民族主義（漢民族的な）を建築で表現しているとすれば、一九五九年の人民大会堂はさらに広義の民族主義（インターナショナル）を表現したと言えるであろう。

社会主義中国の建築の変化はその後も続いている。趙冬日の設計にも変化が見られる。改革開放以後、漸く思想的にも許容度が広がり、趙冬日は同仁医院の増築に際し、モダニズムを採用した。この作品は、山口文象の日本歯科医専との類似点が指摘できるが、一方、資本主義陣営では時代はポスト・モダニズムを迎え、衆目を集めていた。今日、資本主義陣営の様々な建築思潮も導入され、社会主義の様式はさらに変容を遂げようとしている。建築は社会変化の晴雨計でもある。

2 社会主義における「民族」

さて、一九五〇年代の社会主義における「民族」とは、今日、研究者の視線が注がれているエスニック集団ではなかった。ナシヨナリズムはエスノ・ナシヨナリズムではなかったのである。当時のナシヨナリズムの典型的特徴は、結論的に言えば、それは中国のネーションの確立をめざすナシヨナリズムであり、階級の

主体性を強調するものであった。

こうした階級の主体性をもつナショナリズムは、多民族の問題を取り入れようとしていた。中国の研究者は一九三〇年代と一九五〇年代の中国民族観を区別して、「中国は単一民族国家」であると強調した国民党と鋭い対比を見せるのが、「 \wedge 中国人 \parallel 中華民族 \vee は五六の民族から構成される民族」であり、「中国は統一された多民族国家」とした¹⁾。

しかしながら、民族の主体性の強調を目的にしている訳ではなく、民族の差異を無くすことを最終的目標としているので、結果として、近代の民族主義建築と同じく漢民族の建築様式となった、と言わねばならないであろう。さらに、多民族の独自の様式へと発展せずに、インターナショナルな折衷主義へと走ったのである（図23）。

「大屋根」も、また「折衷主義」についても、「民族主義」を巡っ

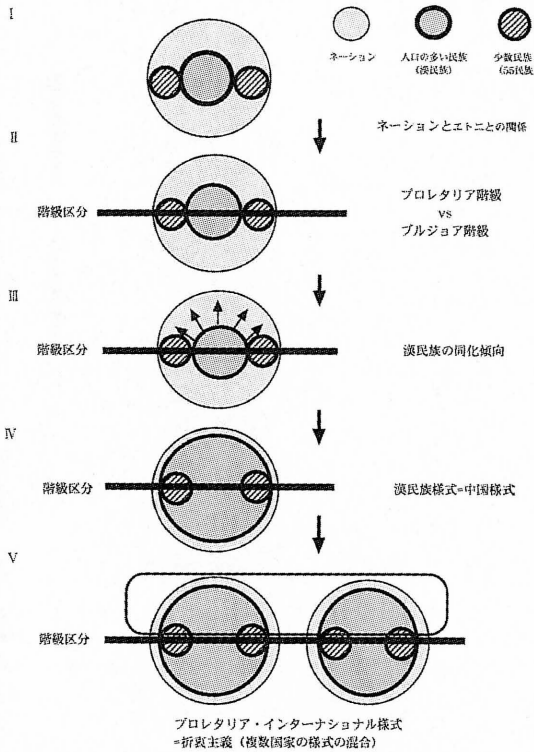


図23 1950年代の中国における折衷主義建築とプロレタリア民族理論構図

て検討されていた。より正確に言えば、「階級」的な「民族主義」を巡って展開していたと言えるであろう。とりわけ、人民大会堂はその時代の典型的な作品と言える。全世界の被圧迫民族の力を誇示するため、巨大な折衷主義建築が誕生したのである。しかし、「ネーション」は想像的な共同体であり、「エトニ」は独自の文化を持つという特徴に対して、「階級」はどのようなカテゴリーになるであろうか。バリバール／I・ウオーラーステインの『人種・国民・階級』⁴によれば、階級は歴史を分析するための理論的カテゴリーに過ぎず、階級の共同体などというものはない。現実には人々は何らかの共同体の一員として生きているのであり、階級という事実は共同体というプリズムを介して表現されるほかはない。

現実には、「階級」を主体とした建築における民族様式の探索は、「階級」論の消失によって過去のものとなった。

3 社会主義の「民族形式」と経済性

経済性について言えば、社会主義の初期には、民族形式と経済との矛盾が主たる問題であった。かつて、一九三〇年代の日本では、プロレタリアを表現するモダニズムは、帝冠式建築や折衷主義建築とは全く対立している美学として存在していた。しかし結果的には、日本ではモダニズムが抑圧された。

一方、一九五〇年代における中国の社会主義建築美学では、工業化を基礎にしたモダニズム美学は否認されていた。スターリンにより、社会主義と民族主義は芸術領域において結び付けられ、社会主義の民族形式は建築美学として成立したのである。

このような美学は、公認のイデオロギーという全体主義の特徴と同様に、統治的な地位を有している。現

実に、工業化生産、とりわけ住宅生産は、社会主義初期のプロレタリアートの住宅問題を解決するための有効な手段となった。工業化における、美学上の否認と現実上の必要との矛盾は、解放後一〇年を経てもなお、根本的には解決していないと言える。

4 日本のナシヨナリズムとの関連性

また、一九五〇年代の中国と一九三〇年代の日本とは、一見、無関係とも思われるが、建築様式の内在的類似性は否認できない。趙冬日は、その糸を紡ぐことの出来る稀少な存在と言える。しかし、趙冬日個人における建築意匠の導入は、決して、日中建築の類似性に至る唯一の要因ではなかった。なぜなら、「民族様式」の建築は当時の中国には数多く存在していたのである。

類似性に至る今ひとつの要因は、両国に存在しているナシヨナリズムの問題であらう。ただし、それは性格を異にしたナシヨナリズムであった。つまり、中国の階級的主体性のナシヨナリズムに対して、日本は日本を中心とした大アジア主義、また大東亜共栄圏の思想を背景にしたナシヨナリズムであった。

趙冬日は多くの留学生と同じく、大東亜共栄圏の思想に反対するナシヨナル・アイデンティティに立脚している。彼は日本の様式を参照しつつ、階級的主体性のナシヨナリズムを表現していることは疑いない。これは建築表現の類似性に見られる根本的な相違であらう。

趙冬日は留学生として、日本に学んだ。帰国後、中国の社会に生き、中国建築の歴史の一齣を演出した。彼は社会主義建設初期における社会主義建築史の証言者であり、また中国の社会主義建築の基礎を築いた人物である。彼によって設計された人民大会堂は、一九五〇年代における中国政治の総合的産物であるが、同

時にこの作品は、政治的理念が如何に建築に表現され得るのか、また、今後どのような建築を造るべきかについて、後世に様々な課題を残している。

註

- 1 松本ますみ『中国民族政策の研究』多賀出版、一九九九年二月、一二頁。
- 2 Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Verso, 1983 (revised edition) 1991. ヘネディクト・アンダーソン著、白石隆・白石やや訳『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NIT出版、一九九七年（増補版）を参照。
- 3 Anthony D. Smith, *The Ethnic Origins of Nations*, Basil Blackwell, Oxford, 1986. 『ネイションとエスニクティ—歴史社会的考察』巢山靖司他訳、名古屋大学出版会、1999。スミスはエスニックな共同体を「エトニ—ethnie」と呼ぶ。その特徴は①名前を持つこと。②共通の血統神話。③歴史の共有。④独自の文化の共有。⑤ある特定の領域との結びつき。⑥連帯感。
また、Fredrik Barth ed., *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Differences*, Universitetsforlaget; George Allen and Unwin, London 1969. (フレドリック・バルト編『エスニック集団と境界』(序文のみ) 青柳まこと編『エスニック』とは何か—エスニシティ基本論文選』新泉社、一九九六年所収) を参考。
- 4 Etienne Balibar and Immanuel Wallerstein, *Race, nation, classe*, LaDecouverte, Paris, 1988. 若森章孝他訳『人種・国民・階級—揺らぐアイデンティティ』大村書店、一九九七年。
- 5 稲垣栄三「合理主義の方向転換」『日本の近代建築「その成立過程」』鹿島出版会、一九七九年、下巻参照。

趙冬日年譜

一九一四年九月 遼寧省彰式県出身

一九三二年 北平の高校へ

一九三四年 日本へ、日本語を習う

一九三五年 早稲田高等工学校入学、予科

一九三八年 早稲田高等工学校卒業、早稲田大学理工学部建築科入学。土木を学習するために日本に留学したが、建築を選択した。在学期間文学作品を発表。師は伊東忠太、田辺泰、佐藤武夫、佐藤功一である。卒業設計は「大陸に建つ農民会館」、卒業論文は「中国建築裝飾に就いて」（伊東忠太『支那建築裝飾』全三巻、一九四一—四二年）、国会議事堂を見学。

一九四一年三月 早稲田大学卒業、北京へ戻って、華北交通株式会社就職

一九四二年 北平大学工学院建築系教授（一九四四年）

一九四三年 『中国庭園と国民性』（『華北建築』第二〇号）を発表

一九四四年 河北省建築庁营造科（保定、一九四五年）

一九四六年 東北大学建築系教授、系主任

一九四九年 北洋大学建築系教授兼河北省高等工業職業学校校長

一九五〇年 建国後、北京建設局計画処副処長、四月二〇日「首都建設計画についての意見」（朱兆雪共著、

自刊）を発表

一九五三年 北京建築專科學校副学長（一九五五年）

一九五四年

北京市建築設計院總工程師を兼任、その後、北京市計画局主任、北京市全体計画の責任者となつた

一九五四年

中央直屬機關礼堂を設計

一九五五年

北京同仁医院を設計

一九五五年

全国政治協商會議ホールを設計

一九五六年

北京市委員会ビルを設計

一九五七年

「論医院建築」(『建築学報』一九五六年一月)、「全国政協ホール」(『全国政協礼堂』『建築学報』一九五六年一月)、「論劇場建築」(『建築学報』一九五六年三月)、「社会主義学院を設計

一九五七年

北京市城市計画管理局總建築師。「北京市北郊一居住区の計画図案と住宅設計」(『北京市北郊一居住区の規画方案和住宅設計』『建築学報』一九五七年二月)、「北京市兒童医院の建築設計を論じる」(『建築学報』一九五七年九月)、「建築界の野心家と陰謀家——華攬洪」(『建築界の野心家和陰謀家——華攬洪』『建築学報』一九五七年九月)を發表。城市計画委員会顧問
北京イスラム教経学院を設計。共産党に入党。○八俱樂部・民族事務委員会住宅を設計
ソ連を訪問、国際建築協会に参加、梁思成も参加、發言。日本の黒川紀章も参加

一九五八年

一九五八年

人民大会堂、天安門広場を設計。「北京市白紙坊居住団地の改造計画図案」(『北京市白紙坊居住小区的改建規划方案』『建築学報』一九五八年一月)を發表

一九五九年

「天安門広場」『建築学報』一九五九年九月、「建築事業上集体創作的範例」『建築学報』一九五九年九月)を發表

一九六〇年

「人民大会堂の設計図案の鑑定から新建築スタイルを語る」(『人民大会堂の設計方案評選來談

新建築風格的成長」『建築學報』一九六〇年二月）を發表

一九六三年 「北陽村実験団地計画と住宅設計」（「北陽村実験小区規劃与住宅設計」『建築學報』一九六三年三月）を發表

三月）を發表

一九八〇年 「住宅建築をより合理的に設計する」（「把住宅建築設計得更合理」『北京日報』一九八〇年五月一九日）、「首都建設にはマスタープランを必要とし、さらに、詳細計画も必要」（『北京日報』一九八〇年六月二五日）、「人口の分布を改善し、人口密度を減少する」（『北京日報』一九八〇年六月二三日）、「濟南建築が自分のスタイルを持つ」（「濟南建築当形成自己的風格」『濟南日報』一九八〇年九月七日）、「東京都都市建設考察見聞」（『北京日報』一九八〇年十二月二九日）を

發表

一九八一年 「北京の計画問題と考え」（「北京的規劃問題と設想」『北京規劃建設』一九八一年二月）を發表

一九八二年 「社会主義国家の「計画的に、比率により發展」の法則から北京市のマスタープランを見る」

『建築學報』一九八二年五月）を發表

一九八四年 「建国三十五年来首都公共建築の業績」（「建国三十五年来首都公共建築的成就」『建築學報』一九八四年九月）を發表

「北京長安街計画の若干の問題について」（『建築學報』一九八五年三月）を發表

一九八五年 「創新について」（「試談創新」『建築學報』一九八六年三月）、「首都發展計画について数個問題

の検討」（「首都發展規劃中幾個問題的検討」『建築學報』一九八六年十二月）を發表

「北京發展戰略研究の中若干問題を再議する」（「再論北京發展戰略研究中的若干問題」『建築學

報』一九八八年五月）を發表

報』一九八八年五月）を發表

- 一九八九年 「私の中国建築についての理解と展望」(「我对中国建築的理解与展望」)、『中国建築評析与展望』(一九八九年四月)、「北京の当代建築」(「北京的当代建築」)、『建築創作』(一九八九年十月)を發表
- 一九九〇年 「北京地区住宅方面の若干問題を論じる」(「論北京地区住宅方面的若干問題」)、『建築學報』(一九九〇年五月)、「古都スタイルと現代化發展を論じる」(『建築學報』一九九〇年十二月)を發表
- 一九九一年 北京同仁医院新ビル。「求知・突破・深化」(「求知・突破・深入」)、『建築師的修養』(一九九一年七月)を發表
- 一九九二年 「住宅發展の動きについて分析」(「住宅發展動向浅析」)、『建築創作』(一九九二年二月)、「医院建築設計の探索」(「医院建築設計の探索」)、『建築學報』(一九九二年六月)を發表
- 一九九三年 徐向前元帥記念碑を設計。「北京天安門広場東西地区の計画と建設」(「北京天安門広場東西地区の規劃与建設」)、『建築學報』(一九九三年一月)を發表
- 一九九四年 「北京都市計画と建設の感想について」(「關於北京城市規劃与建設的感想」)、『建築創作』(一九九四年一月)、「都市特色なスタイルの継承と發展」(「城市独特風貌的継承与發展」)、『建築學報』(一九九四年二月)、「人民大会堂の設計過程を回憶する」(「回憶人民大会堂設計過程」)、『北京文史資料』No.四九・一九九四年二月、一二—三三頁)を發表。世紀村Ⅱ区六号楼、天井式高層住宅、北京金融街詳細計画図案を設計
- 一九九七年 投資招商ビルを設計

発表を終えて

京都のお寺や町並みは夙に有名で、古より中国文化との深い関係が偲ばれる都市であります。日中文化交流史を研究している私にとって、京都は一度は住んでみたいと憧れていた場所でもありました。

今回、夢のようなチャンスをいただき、京都の西、美しい山に抱かれ、季節の変化を満喫しながら、充実した一年の研究生活を送ることができました。

日文研の国際・学際的な研究環境は非常に刺激的なもので、私は様々な専門の研究者との交流を通して、問題意識を醸成させ、さらに、これまで自分が抱いてきた問題を解決へと導き、研究をスムーズに進展させることができました。ここに、日文研の諸先生方、また客員の先生方に厚く感謝申し上げます。

今回のフォーラムで発表した内容は、日中間における都市・建築文化交流史の一部であります。現在進行中の研究でもあるため、内容的には再検討を要する部分もあろうかと思いますが、最後まで熱心にご清聴いただきまして、有り難く感じました。また、原稿を推敲している間、井上章一先生、劉建輝先生には貴重な助言を戴き、心から感謝いたします。

最後になりましたが、研究期間中、常に惜しめない協力を傾けて下さった研究協力課、図書館、情報課の方々に深く感謝申し上げます。

京都の一年は、私にとって忘れられない一年となりました。有り難うございました。

徐蘇斌

日文研フォーラム開催一覧 (101回以降)

回	年月日	発表者・テーマ
⑩①	9.11.11 (1997)	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) キニヤ・ツルツタ 鶴田 欣也 (プリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩②	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩④	10. 2.10	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者—休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩⑧	10. 6. 9	<p>Hiroshi SIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」</p>

⑩⑨	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラスミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死亡？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖頌詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
120	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noel A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
123	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリヤード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
125	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
126	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
128	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑬⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⑩	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
⑬⑪	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬⑫	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑬	13. 4.10	Lǐ Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬⑭	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭⑩	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤 —留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を 中心に一—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサキムラステイブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
146	14. 1.15 (2002)	SHIN Chan Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
147	14. 2.12	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

150	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禪心理学的生命観」
151	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2002年9月30日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

© 2002 国際日本文化研究センター

■ 日時

2001年6月12日(火)

午後2時～4時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

第一四〇回
中国现代建築の成立基盤

徐蘇斌

国際日本文化研究七七